菅沼岩蔵著

文学文章改良論

東京　高山房發行

言文一致 桃太郎話の附録

文字文章改良論

東京 嵩山房發行

810.95w695m

文字文章改良論目錄

文字文章改良論の序（文學士　上田萬年君）　ね
緒　言　あ
古人の遺物　一
第一　總　論　五
第二　文字文章改良の必要　六
第三　新道開鑿の比喩　九
第四　文字文章改良の困難及び思想道新舊線路圖　一三
第五　文章改良の順序及び假名奬勵案　一九
第六　文章改良の結局、新國字の見本、及び假名の會の再興　二八
第七　文字文章研究會の組織　三〇
第八　假名遣ひに就て　三二

国立国会
29. 2. 15
図書館

319413

第九　文躰に就て　三四
第十　國語の統一　四〇
第十一　文法と語法との區別　四三
第十二　文字改良と皇政復古　四四
第十三　文字改良の過去、現在、未來　四五
第十四　文字文章改良論者に勸む　五一
第十五　新文躰を普及せしむる一方便　五二
第十六　教育上に於ける童話の價値　五六
第十七　外山博士の論説　七〇
○漢字を廢すべし　七一
○漢字を廢し英語を熾に興すは今日の急務なり　一〇六
○羅馬字を主張するものに告ぐ　一一八

○羅馬字會を起すの趣意　一二三
第十八　英語沿革考（文學博士　末松謙澄君）　一三三
第十九　卑見を約言す　一四一
第二十　文字文章改良に關する論説　一四五
附　錄（英文）　1—25

文字文章改良論の序

言語ありて後始めて人類あり、文字ありて後始めて開化あり、この言語とこの文字とは、誠に教育の二大要具なり。

教育家たるもの、苟もこの兩者につき精査討究するなからんか、一を以て得べきの結果も、十を以てしてなほ且得がたきの歎あらむ。況んやまた世人が疎末なる感情に賴り、理想もなく定見もなく、議論を上下し居る以上は、よし幸にして或る一派の論者の希望の如く、日本は東洋の覇王たるを得べしとはするも、進んで世界の主宰者たるべき大希望を達せんとするに至りては、到底夢にだも成功しがたき事なるべし。

大なる希望には大なる計畫を要す、大なる計畫には該博なる學識と深遠なる考慮とを要す、從つてまた忍耐の精神と不羈の元氣とを要す。

靜岡縣中學校教諭菅沼君、夙に玆に見る所あり、曩に言文一致桃太郎の話を著し、今またその附錄文字文章改良論を公にせらる。予は不幸にも二三の點に於て、君の所見と一致する名譽を有せずと雖も、しかも君が熱心と君が計畫とに至りては、滿腔の同情を表せざらんと欲するもまた得べからず。殊に君が教育家として、且はまた一地方文運の代表者として、能くこの輿論の先導となりたまひしを見ては、我邦に於ける言語文字

教育の未來のために、深く慶賀して止まざる所の者あり。乃ち帝國の前途も、君を竢ちて敢て多望ならずとせず、快なる哉。聊か蕪辭をつらねて序とす。

明治二十八年十二月　　上田萬年識

緒　言

一我國現時の文字文章の學習に困難にして使用に不便なるとは之を西洋の文字文章と比較したる人の明かに認むる所なるべし。

一文字文章の事たる其の關係する所廣且つ大にして、殊に學校及び社會の敎育に至大の關係を有す。是を以て日本人の躰格を强めんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。日本人の道德を高めんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。日本人の智識を增し技能を長ぜんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからす。武育躰育を奬勵せんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。女子敎育を振興せんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。理學思想を普及せんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべかず。衞生思想を養成せんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。實業を振作せんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。日本をして西洋の强國と比肩

せしめんと欲せば先づ文字文章を改良せざるべからず。文字文章の改良は根本なり、他物の改良は枝葉なり、枝葉の改良のみに汲々として根本の改良を忘れ或は怠るべからず。

一文字文章改良の問題は、教育及び文學に取りて極めて大切なる問題なり。教育者、文學者は熱心に之を討究論難し、以て此の問題をして正當の議決に歸着せしむるの義務あり。既に文學者の之を論ぜし者頗る多し、教育者も亦默すべきに非らず。

一文字文章改良の問題は、今より十餘年前にも、一度提出せられたるとありき。然るに時機の未だ熟せざりし爲めか、將た時人の安逸を貪りしが爲めか、抑も又學者の忍耐足らざりしが爲めか、此問題は幾くもなくして消滅に歸せり。然るに近頃國人の元氣復活せると同時に、此の問題の再び提出せられたるは、我國の文學の爲めに、我國の教育の爲めに、又我日本の國家の爲めに、大に賀すべきの事たり。此問題のふたゝび冷遇さるゝが如きとなくして正當の議決に歸着せんとは予の切に望む所なり。

一文字文章の事たる其の關係する所廣且つ大にして、殊に西洋諸國との競爭上に至大の關係を有す。若し其の改良の着手にして一日を緩うせば西洋諸國に後るゝこと一歩を增すべく、一月を緩うせば百歩を增すべく、一年を緩うせば萬歩を增すべし。日本國の盛衰に無頓着なる輩はいさ知らず、苟くも日本國の未來を憂慮せん者が最も深く精神を凝らし、最も誠實に、最も虛心に研究すべきものは、蓋し文字文章改良の大問題なるべし。之に直接の關係ある文學者、教育者は言ふに及ばず、其他苟くも此問題の意味を理解せん者は、宜く全く其の私心を去りて熟考し、各々其所見を吐露して討究すべし。己れの說已れの身に不利なるが爲めに默すべからず。急激として指彈せられんことを恐れて默すべからず。輕躁として蔑視せられんことを恐れて默すべからず。因循

として擯斥せられんとを恐れて默すべからず。頑固として嘲笑せられんとを恐れて默すべからず。是れ予が淺學不才をも顧みず、世人の嗤笑をも恐れずして、嗚呼がましくも敢て此書を編し、已れの所見を開陳する所以なり。夫の『言文一致桃太郎の話』に用ひたる書き方の如きは、予が諸家の所論を折衷參酌して之を撰び、讀者に向て其の便否を問はんが爲めに提出したるに過ぎず。單に郭隗を學んで自ら改良實行家を以て任じたるのみ。更に他の方案の續々議場に提出せられ、他の俟補者の續々競爭場裡に名乘り出で、終に最も便利にして最も立派なる書方の勝利選定に歸着せんとは予の切に望む所なり。

一予が此書を編するに際し、外山、末松、加藤、井上、諸博士の論文、東洋學藝雜誌、大日本敎育會雜誌、早稻田文學、帝國文學、六合雜誌、萬朝報英文欄等は予に少からざる補助を與へたり。又其他にも予の參考せし書籍雜誌等頗る多し。予は是等の書籍新聞雜誌等に對し、深く予に與へたる恩惠を謝す。

明治二十八年十二月　　編者しるす

古人の遺物

○遠江國菊川の宿にて　　日野俊基

古もかゝるためしをきくがはの
同じ流に身をや沈めむ。

○後醍醐天皇御製

さして行く笠置の山を出でしより
天が下にはかくれがもなし。

○松の下露御衣の上に散りかゝりければ　　藤原藤房

いかにせむたのむ陰とて立寄れば
なほ袖ぬらす松の下露。

○後醍醐天皇名和長年に迎へられて船上山に立籠らせましまし、時、御前に侍べる千種忠顯に帆かけたる舟の形をかゝせて、長年の家の紋章に賜はり、宸筆の御文の奥に

わすれめや　よるべもなみの　荒磯を
　　み船の　上に　とめし　心は。

兒島高德

○行宮の庭の櫻の木をおし削りて

天莫空勾踐、時非無范蠡。

楠正行

○如意輪堂の壁に

かへらじと　ろ絲て　おもへば　梓弓
　　なほ　數に　入る　名をぞ　留むる。

島津久光

○文久二年壬戌四月二日播州室津に於て述懷

自出家鄉已二旬。　轎舟渡得幾關津。
此行何意人知否。　欲拂扶桑國裡塵。

頼山陽

日本外史楠氏記緒論

外史氏曰。予修將門之史。至於平治承久之際。未嘗不舍筆而歎也。嗚呼。世道之變。名實之不相讐。一至於此歟。古之所謂武臣者。勤王云爾。如源氏平氏。莫不皆然。至於平治之後。乘綱維之弛。以逞鴟梟之欲。有暴悍無忌者焉。有雄猜匪測者焉。雖所爲不同而其蔑王憲營私利一耳。然猶有可言。曰王族也。將家也。至於北條氏。以將門屬隷而坐制朝廷。天下之事。

不復忍言也。且夫承久之事。孰曲孰直。筆而傳之者。皆出北條氏盛時。今安考信焉。況君臣之際。寧可較曲直也。乃指斥憑怒。極其凌辱。視萬乘之尊。不啻如孤豚。嗚呼。八洲生民。誰不被先王之遺澤。當時所謂武士者。狃其豢養。供其使喚。雖名位族望遠出其右。者。奔走驅馳。甘爲之役。之不暇。氣類所召。習以爲常。豈可勝言哉。即稱爲公卿者。平時趨蹌朝廷之上。取天子之爵秩。以驕天下。而及於此際。未嘗畫一策。以救危難。袖手傍觀。以聽其所爲。是曷尤於武人邪。雖時勢有所未可。君德有所未洽。以致乎此禍。而亦臣

子之罪矣。自是以來。百餘年間。廢立黜陟。一仰其處分。而朝廷蹙蹙。如被束縛。至於窺其顏色。以爲憂喜。何其甚也。余聞。後鳥羽上皇之徙隱岐也。因石窟縛屋纔庇風雨。十有九年。乃崩。蓋父子三帝。隔絶千里。各居窮海。終天不得相見。是其心何嘗一日忘北條氏哉。則元弘之事。萬不可已也。而其勤王之功。余以楠氏爲第一。微楠氏。則西狩之駕。吾見其與承久歸一轍而止而已。何哉。彼北條氏雖失於政。其權力有更甚焉。籍累世之威。而加積弱之餘。百萬虎狼隨其指呼。忽瞞中國。莫之或攖。天下方以承久爲戒。重踵

屏息莫敢言勤王之事而楠公獨以眇眇之軀唱義其間當其衝路挫其爪牙以皷舞四方義士之氣使之一時踵起殄戮元惡於斧鉞之下報列聖之深仇雪累朝之大耻天下萬姓再得仰日月之光雖曰屬皇運之泰而非公爲之唱焉能至此是焉知非天生斯人以匡濟世道哉後之論者或有比之唐張巡者巡戴全盛之唐室拒狂胡之偏帥有二顏爲之先有許遠爲之助而不過遮蔽江淮守城致死以公視之勢之難易功之大小豈可同日而語也要之位不滿其器莫能展其才而終能以躬殉國靖獻先王餘烈

所及不獨其子孫自公卿自將士各執弓箭以勤王事概皆聞楠氏之風而起者也嗚呼如楠氏者眞可謂不愧武臣之名矣余故敍楠氏之事以繼源平氏云

文字文章改良論

菅沼岩藏著

第一　總論

○第一　總論

予つら〳〵我國の文章に對し世人の抱ける考へを推察するに、大概左の數種に歸するものゝ如し。

(一)或人は漢字の利害等は少しも考へず、たゞ凡て文章なるものは、何れの國にても同樣に六ヶ敷ものなりと思ふて居る。此類の人は未だ洋學を學ばざる人に多きが如し。

(二)或人は、漢字を用ふることは極めて便利なり、漢字を敎へ込む事は、取りも直さず、實用の知識を敎へ込む事なりと思ふて居る。此類の人は漢學者に多きが如し。

(三)或人は、漢字を多く用ふるは害あれども、少しく之を假名文に交ふるは大に利あり、故に三千字位を限りて漢字を用ひんと思ふて居る。此類の人は初等教育に從事せる人に極めて多きが如し。

(四)或人は、漢字の害を知ると雖ども、之を廢する事は到底出來難しとあきらめて居る。此類の人は國學者及び洋學者中未だ西洋の言語史及び文學史を讀まざる人に多きが如し。

(五)或人は、漢字全廢の出來得べきを知ると雖ども之を成就せんには多くの困難を經過せざる可からず、之を成就せん爲めの勞力と、之を成就したる後の利益との差引勘定を爲さば、其得失如何あるべきかと思案して居る。此類の人は當世の文學者を以て自ら任ずる人に多きが如し。

(六)或人は、漢字は早晩廢せざる可からざるを知ると雖とも、さて之を廢するの方法は如何にすべきか、如何なる文字を以て漢字に代ふべきか、羅馬字は西

洋の文字なれば恐らくは感情上、我國には行はれ難からん、假名は何分從來の書き方にては讀み惡し、別に何ぞ名案も出よかしと、しきりに新案の出でん事を待ちて居る。此類の人は學識ある教育家に多きが如し。

(七)或人は、羅馬字を以て漢字に代へんと思ふて居る。此類の人は日本に久しく在留せる西洋人、及び洋學者中未だ假名文の書き方に一大改良を加へば、羅馬字文よりも一層便利なるものと爲し得べき事を信ぜざる人に多きが如し。

(八)或人は、舊來の假名を以て漢字に代へんと思ふて居る。併し同じ假名文主義の中にも之をよく、しらぶれば左の三種の區別あるを見る。即ち(甲)守舊主義と名くべきもの、(乙)漸進主義と名くべきもの、(丙)急進主義と名くべきもの是なり。守舊主義の人は國學者に多く、漸進主義の人は教育家に多く、而して急進主義の人は洋學者に多きが如し。

(九)或人は、新國字を製し以て漢字及び舊來の假名に代用せんと思ふて居る。

此類の人は文字改良論者中、羅馬字會及び假名會の失敗に懲りたる人に多きが如し。

(十)或人は以爲らく、「國字改良の最も安全なる方法は漢字の使用を漸次に減少し、假名の使用を漸次に增加するに在り。其第一の着手として、假名綴りにて不都合なき言葉は、成るべく漢字をはめずして、假名を以て綴る事にせん。其內には假名文も追々發達して、讀み惡からざるものとならん。又其內には新國字を主張する人も增加するならん。又時世或は變轉して羅馬字の世とならずとも言ひ難し。今の時にあたりて能く文字改良論者を一統し、以て頑固なる漢字保存論者を征服すべきものは、ひとり此の假名奬勵主義あるのみ」と。此類の人は思慮深き學者に多きが如し。

以上述ぶる所、未だ世人の考へをつくさざるべしと雖ども、又多くの遺漏もなかるべしと信ず。右十種の考への中にて、予の最も同意を表せんと欲する所の

ものは第十の考へなり。是れ其主義の最も安全にして、且つ最も行はれ易き事を信ずればなり。然れども、予は決して羅馬字主義及び新國字主義に反對する者に非らず。たゞ是等の主義の各々孤立して、合同の運動を爲す能はざることを深く慨嘆するに過ぎざるのみ。讀者、こひねがはくは、其心して以下に述ぶる所を讀みたまはれよ。

○第二　文字文章改良の必要

我國民の智識を增進する最良の方法は、思想表白の器械たる文字文章を簡易にし、多數の人民をして、容易に之を誦讀し、容易に之を使用し得しむるに在り。然るに今日我國に行はるゝ所の文章は、漢字と假名より成れるが故に、數万の語を學ぶの困難の外に、數万の字を學ぶの困難あり。是れ彼の二十六字のアルハベットをだに學べば、(發音と綴字法とを學びて)、あらゆる語を讀み且つ筆し得る簡便にくらべて著く劣る所なり。今、習字の一點のみに就きて考ふるも、西

洋のアルハベットは其字數僅かに二十六のみなるが故に、之に熟せん事は極めて容易なり。然るに、我國に用ふる所の漢字は、其數莫大なるが上に、楷、行、草の三體を習はざる可からず。楷書のみを習ふて行、草を習はざれば、手紙等を讀む事も、書く事も、六ケ敷かるべし。予は此一點に就きても、我國の教育が西洋の教育に比して、非常なる損失を受けつゝある事を感ず。現今我國の尋常中學校に於て、一年間、毎週二時間づゝ、英習字を習へば、其れにて一通りは間に合ふなり。然るに、日本習字は、中學第一年期に於て、一週一時間、第二年期に於て、一週一時間、第三年期に於て、一週一時間なり。之に尋常、高等小學に於て習字に用ひたる時間數を加ふれば、其數實に驚くに堪へたるものあり。我國の學生たる者の勞、亦大なりと云ふべし。而して其上にても草書の如きは、尚ほ未だ十分とは謂ふ可からず。此上にも、大に獨習に時を費す人頗る多し。故に、日本の學生は、單に學問上の器械たるに過ぎざる讀み書きに過

多の時間を奪はれ、爲めに實用の智識技能を習得するに用ふべき時間は甚だ少く、又德育、體育の如きも、之が爲めに非常の損失を蒙れり。今參考の爲め、獨乙の初等學校に於ける習字時間數と、我國の小學校に於ける習字時間數との比較表を左に掲ぐ。

獨乙日本兩國の小學校に於ける習字科毎週教授時間の比較

	第一年	第二年	第三年	第四年	第五年	第六年	第七年	第八年	合計
日本	5 (16)	5 (16)	5	5	3	3	3	3	三一
獨乙	3½ (10)	3½ (10)	3½	3½	2	2	—	—	八

右の表中、第一年、第二年の(16)(10)は讀書作文を合せたる時間數なり。獨逸に於ては第一年、第二年に於ては、讀書、習字を一科として、同時に教授する

との事なり。又、獨逸に於ては獨逸字、羅馬字兩體の習字を爲さしむるを以て、英米の諸國よりも習字に用ふる時間、割合に多き譯なりと云ふ。之を英人に聞くに、英國の小學にては、習字手本を習はしむる時間は甚だ少く初級三四年の間のみなりと云へり。予未だ英國小學校の時間配當表を得ず、此處に明記して比較するを得ざるは頗る遺憾なり。

右は、單に習字の事に關して述べたるなるが、又、讀方の事に關して如何にと尋ぬるに（以下多く早稻田文學第八十七號中の文句を借用す）、抑々、我國文中に用ふる所の漢字には、毎に音訓の二讀法ありて、一漢字音を學ぶ毎に、あはせて、其の訓をも、字形をも學ばざる可からず、故に字形を學習するの外に、常に音訓の二者を諳記し、讀み、且つ筆するの瞬間に、機に臨み變に應じ、二者を運用せざる可からざる面倒は、古今曾て見ざる所なり。所詮、我國に於ては、一語を學ぶ毎に三樣の勞苦を經ざる可からず。音を學ぶの勞と、訓を學ぶの勞と字形を學ぶの勞と、是れなり、而して、時としては、一語にして數音なるあり。（吳音、漢音、淸音の數樣に發音せらるゝ塲合の如き）又語毎に少くも三四樣の異訓あり。甚しきに至りては、字形も亦二三樣あるものあり。かくの如きの不便は、前古絶えて見ざる所なり。試に今日普通以上の敎育を受けたる者をして、馬琴等の稗史の傍訓を拂ひ、然る後、一瞥下に朗讀せしめよ。彼等の大概は、數行ならずして幾たびか誤讀し、若しくは殆んど讀下する能はざることあらん。甚しきに至りては啻に讀む能はざるのみならず、其の意をも明解し得ざることあるべし。所謂、湯桶讀又は宛字の推讀し易からざるもの夥多あればなり。單に讀む時に於て不便なるのみならず、自家の感想を表白して、之れを筆記せんとする時にも、毎に屢〻不便なるを感ず。例へば、其の人普通以上の知識あるも、尙時としては單に音訓のみを記憶し、其の字を忘れたる塲合あり、字は記したるも音又は訓を忘れたる塲合あり。後者は尙忍ぶべし、前者の障礙は

大なり。印刷業に縁故ある人は、試に近時の劣等なる印刷物の原稿を取りて檢せよ、劣等なる新聞紙、劣等なる雜誌の文章の、如何に活版童兒輩の骨折によりて其の不躰裁を蔽へることの多きぞ。原稿のまゝを印刷せば、誤字、衍字はいふに及ばず、『康熙字典』中に見いだしがたき文字、恐らく算するに遑なからん。又原稿者をして件の原稿を朗讀せしめよ、彼等の十中五六は、自家の綴りたる文中の語を、或は誤讀するなきを保せず。彼等の或者は正音を知らずして漢字を用ふることあり、訓を會得せずして漢語を用ふることあり、ましてや字形の如きは、間〻推當(オシアテ)に筆し去るなり。苟も新聞雜誌等に上るべき原稿に、かゝる不躰裁のことあるは、甚だ奇怪なることに似たれど、また翻りて我が國字を檢し、其の眞に學び悪きを思へば、かゝる不躰裁と不都合とは自然の結果なりといはざるを得ず。而して此自然の結果は國家多事となるにつれて、益〻其量を加へ來たらん。今日すら已に然り、我が未來の同胞、又は新版圖の國人等は、此

の自然の結果の爲に、いかばかりの不便を經驗すらん。假に大なる不便なかるべしとするも、かゝる面倒なる文字を學ぶ爲に費やす時間及び之れが爲に勞する心力は、他に利用するに適せざるか。徒勞と不便とを感じながら、曾て改良の策を立てざる、これを忠實なる國民といふべきか。漢字を全廢して表音字を用ふるは、此の徒勞と此の不便とを一擧に掃蕩する良策にはあらざるか。今こゝに諸家の說に憑りて漢字全廢せられ、音字のみを以て感想を表示するの曉、實現せらるべき便益を列擧せんに。音字のみとならば

(一)音、訓、字の三樣の修業を經、且一語毎に此の三樣を諳記するの繁を脫し、單に音字若干と各語の綴字法とを諳んぜば、あらゆる語を筆記するに差支なかるべく、又其の語義をだに會得せば、あらゆる感想を表白するに差支へなかるべし。(大西祝氏の說)。

(二)字の數は、羅馬字風の純粹なる音字を用ふるか、我國の假名の如き聲字を用ふるか、其の決着次第により　結果同一からざる可けれど、何れにもせよ、二百字以上を越ゆべからず。さすれば字は多くも二百內外を學ばば事足るべし。即ち僅〻二百字內外の文字を諳んぜば、讀み且つ筆するに於て故

障なかるべし。

(三)音字、若しくは聲字を用ふると同時に、內外の人名、地名、物名等は六歳の兒童も容易に讀み得るに至らん。ことは全然一掃せらるべし。即ち左記の人名、地名、物名等を讀み難み、讀み惑ふ

華盛頓(ワシントン)、隧喜(スエヒサ)、三成(ミツナリ)、藥袋(ミナイ)、三枝(サイグサ)、海江田(カイエダ)、月見里(ヤマナシ)、百鬼(ナキリ)、(以上人名)、波斯(ペルシヤ)、希臘(ギリシヤ)、遠江(トホトウミ)、常陸(ヒタチ)、日向(ヒウガ)、小日向(コヒナタ)、須津村(スドムラ)(駿河國に在り)、阪下(バンゲ)、(岩代國に在り)、一口(イモアラヒ)、(以上地名)、海參(イリコ)、石花菜(トコロテン)、石榴(ザクロ)、鹿尾菜(ヒジキ)、行燈(アンドウ)、提灯(チヤウチン)、湯桶(ユトウ)、重箱(ヂユウバコ)、(以上物名)。

(四)自然の必要によりて普通文は次第に日常の口語に接近し來り、隨つて珍らしき漢語を用ふるの弊は、求めずして減少すべし、蓋し音字は耳に訴ふるを主とするが故に、聞き慣れざる語は誤解せられんの恐れあり、又全く解し難からんの恐れあり。又同一道理によりて、杜撰(ヅザン)なる熟語を濫造するの弊も減少し、文章おしなべて平易通俗となるべし。

(五)文章語の口語に近づくと共に、文章法と口語法との差別も今日の如く甚しからずなりて、遂には、外國にての如く、文章と口語と全くは同一ならざるにも係らず、其の語格(グラマー)ほどは、甚しく異ならざるものとなるべし。即ち二重語格の不便を除くことを得べし。

(六)今日の文章は、兎角に漢字の爲めに掣肘せらるゝが故に、外來の新語、科語等を譯するに當りて、

不穩當と知りながらも、已に漢譯あるものは之を採用する傾きあり。「ケミストリー」の譯語を「化學」とし「ヂオメトリー」の譯を「幾何學」とせるなど、皆漢譯を重んずるの致す所なり、(井上博士の說)。かゝる例穿鑿せば尙あまたあるべし、又場合によりては、學術上の科語の如きは、到底譯し難きもの多く、或は生中(ナマナカ)に譯するときは、徒に解し難く讀みにくきのみにて、何の益なさゞるのみか、却りて誤解と臆測とを促すの弊あり、かゝる語は、むしろ原音のまゝ用ふるが便利なれども、從來の習慣上、已むを得ず不安なる漢譯を塡め、若しくは漢字もて其の音を表す、醫學上の科語、病名等、是れなり、これらは生中に漢字のあればなり、漢字全廢せらるゝに至らば、蓋し大抵の科語は、原音のまゝに採用せらるゝことゝなるべし、總て科語、專門語は、一聞一見したるのみにては門外漢には解しがたきもの、而して專門家にとりては譯名は不要のもの、到底無用の長物たる漢語譯の廢せられんは必然の理なり、これまた徒勞を減ずるの一端なり。

(七)音聲字のみを用ふることゝならば如何なる場合に於ても、振假名を用ふるが如き厄介を脫すべきがゆゑに、筆記の手間もまた減ずべし、空間(スペース)の上よりいはば、或は一語の充塡する場處、一漢字に比して長大ならんとも思はれんが、畫の多き漢字を筆するに比せば、其の難易辯を俟たざるべし、若し井上博士の唱へらるゝ如き横文字の聲字(シラビック)ならば、羅馬字よりも更に簡便なるべし、(是れ博士が最も得

意とせらるゝ論點なり）例へば「濱」と筆するに、羅馬字ならば、hamaと音字四箇を要すべけれど、博士の新字にては、僅にはまの二字にて足るべし、而して若し嘉納氏の說によらば、速記法の文字を用ふるが故に、更に更に簡便なるべし。

（八）音聲字によりて表示せらるゝ語のみとならば字書を製するにも最も便なり。上田万年氏の所謂標準的國語を精査し、且つ各語の音調をしらべ、一々に語原釋義を附記し、而して日本大辭書を編成せば、豈にひとりリトレー、ウエブストル等をして完備を誇らしむることあらんや、是れ亦改良文字の賜なり、今日の有樣にては、殆んど完全なる辭書を得んの望みなし、よしや完全なる辭書成るべしと假定するも、畫によりて引くべき漢字典と音訓によりて引くべき音訓辭書と、此の二種を備へざる可からざる不便あり、要するに我國の國語には兎角に二重といふ不便纏綿して累をなす之を一掃せんは改良文字即ち音聲字なり。

此處に少しく獨學の事に就て附言せんに、歐米の諸國の如く文章平易にして、辭書の完備せる國に在りては獨學と云ふ事いと容易なり。日本人が外國の語なるにも拘はらず、英獨の語を容易に獨習し得るを見ても之を知るを得べし。然るに我國に在りては、字書に見えざる六ヶ敷熟字多きと、何の部にて引く可きか容易に分らざる漢字多きが爲め、獨學の困難非常なり。二宮尊德翁の傳を讀みても獨學

する事の如何に難儀なるかを知るを得ん。而して西洋諸國に於て學者及び豪傑の多くは獨學したる人より出づる事を思はゞ、漢字の全廢、漢語の減少、辭書の完成は我國の富强に如何なる關係あるかは容易に之を知る事を得ん。

（九）六ヶ敷漢字廢せられ、容易なる音聲字用ゐらるゝ曉には、從來文字を學ぶに用ゐたる時間と勞力とを以て實地有用の學問に用ふる事となるべく、然る時は、我國の實業は大に進歩するに至るべく、又武育、體育に用ふべき時間增加するを以て、隨つて、文弱に陷るの弊をとゞむべく、又德教上の言語平易となるが爲めに、下等の賤民に至る迄、道德の何物たるを解し得るに至るべし。

（十）漢字廢せらるゝの日には、小學校の教育は其面目を一新せん、如何んとなれば現今の教授は文字を讀むことに其主力を用ふれども、其時に至らば語句の意義を理解すること及び習得したる智能を應用することに其主力を用ふるに至るべければなり。

（十一）文字少數とならば活版の事業は益々發達すべし。現今の如く漢字を交ふる文章の印刷に於ては、活字を拾ふ事、一大困難なれ共、假名文（或は他の表音字にて終りたる文章）の印刷に於ては、たゞ百種程の文字及び符號を拾ふのみなれば其業極めて容易なるべければなり。

（十二）音聲字のみを用ふるに至らば、國中の發音法も自然に一定すべし。ハナ（第二上）〔花〕、ハナ

（第一上）〔端〕、ハナ（全平）〔鼻〕、カサ（第二上）〔量〕、カサ（第一上）〔笠〕、カサ（全平）〔梅毒〕、カケル〔懸〕、ハヾル〔耻〕（第一上）、フケル〔耽〕、フセグ〔拒〕（第二上）、カケル〔缺〕、モエル〔燃〕（全平）の音調の差異等も必ず研究きるゝに至るべし（此處に山田武太郎君著日本大辭書の附錄なる日本音調論を參看せよ）。

以上述ぶる所は文字改良より生ずべき利益なり。文字改良に伴ふ所の損失も亦之れなきに非らずと雖ども、此の損失は一時の事なり。一時の爲めに萬年の計をあやまるは智者の爲す所に非ざるなり。德川氏が一時の政略の爲めに、大船を作る事を禁じたるは、今の人の大に惜む所ならずや。吾人今又一時の損失の爲めに文字の改良を躊躇するあらば、後世の人又吾人を如何に評せんか。

○第三　新道開鑿の比喩

明治二十一年一月の大日本敎育會雜誌を見るに西村貞氏の「日年普通文の前途」と題せる論文あり。其中に曰く、

『文章は恰も道路の如く、思想は丁度人、馬、荷物の如し。而して今の普通文は恰も封建時代の道路の如く、羅馬字會の前途は丁度新道を開通するに彷彿たり。此の比擬即ちSimileは日本文の性質、變遷を說くに頗る適當なるものの如し。抑も封建時代の政署は、概して言へば「民は之れに由らしむ可し、之れを知らしむ可からず」と云ふに在りて、思想の流通を成るべく自在にせんことなどは識者の心中にも思ひ起らざりしことなる可し。況してや、「野に遺賢無し」と謂ひて昭代を誇れる世の中にては、識者と云へば皆官府部内の人たる可きに於てをや。隨て文章の如きは少數の人人の專有となりて、多數の者の手に達かざりき。彼の道路も亦天嶮の要害即ち天然自然の嶮岨障害を利して、交通の不便なる方を却て冀望せし趣有りき。故に今日より舊道を見れば棄て置き難き難所多くして、交通、運輸を妨ぐるの不便有るを免れず、是れ新道開鑿の今日に盛んなる所以なり。

今日の普通文は封建時代の遺物にして、其の源は漢文に在り、故に思想の流通に不便なることは彼の天嶮を利用せし道路と一般なり。　されば思想の新道を開鑿せんことは到底避く可からざる必要にして、早晩日本の普通文に一大變動を見る可きこと自然の勢ならん。　併しながら新道の落成は其の期尙遠かる可きを以て、其の落成を見るまでは、舊道に手入れせずして空しく其の不便に任すこと現今の必要之れを許すこと能はず。　因て余は先づ一方に於ては、思想の舊道に手入れして、成るべく其の障碍、不便を減ずることを勉め、又一方に於ては、頻に新道の工事を急ぎて完全なる運輸の便利を開くの日を期せざる可からずと信ず。　卽ち一つには、國民をして羅馬字會の主義を了らしめ、以て新道開鑿の輿論を喚び起さざる可からずと雖、又一つには、今の普通文の改良を要する所以を唱へて、成るべく思想の流通を平易にすることを計畫せざる可からず。』云々。

西村氏の比喩誠に妙なりと謂ふ可し。其當時新道として提出せられたる線路は羅馬字街道及び假名街道にして、一時は兩者共に多數の贊成者ありしも、此等の工事たる一朝一夕に成就す可きものに非らず、所謂百年に亘る繼續事業なれば、之に要する費用も莫大なるが故に、忍耐なき會員は一人二人と漸次に脫會し、却て舊道の保護者となりたる人も多きは誠に惜むべきとなりき。斯くて新道開鑿の事は一時中止となり、數年の間は之を口にする人さへ稀なりしが、近頃又々開鑿論の再燃し始めたるは、我國の普通文の爲めに、又我國の敎育の爲めに誠に喜ぶべき顯象なりと謂ふ可し。

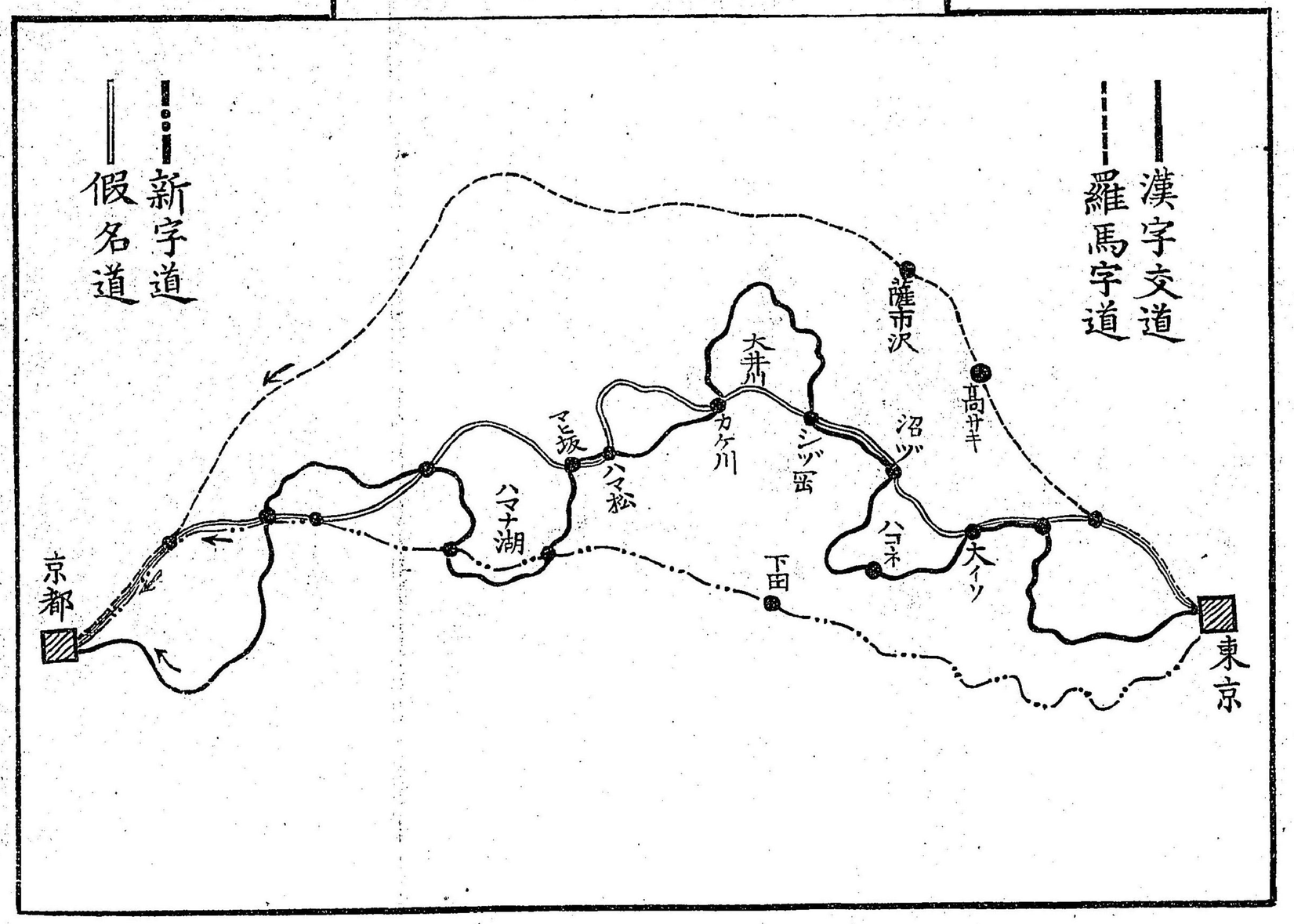
○第四　文章改良の困難

予も亦西村氏に倣ひ新道開鑿の比喩を用ひて文章改良の困難なる所以を明かにせん。

文章は、たとへば東京、京都間の道路の如し。今、舊道卽ち從來の街道にては

其旅行日數十三日、旅費十三圓を要すとせんに、若し新道を開鑿せば日數六日、旅費六圓にて足るべき見込みありとせんには、開鑿の費用はたとひ巨額を要すとも、之を計畫するとは必要なりと謂ふ可し。然るに政府に於ては未だ之を決行するの勇なく、民間の資本家も其の成否を危ぶみて躊躇するが如き場合には如何すべき。新道論者は必ず世人の注意を喚起せんが爲めに八釜しく議論を爲し、且つ會社を設けて廣く其の社員を募るならん。募りに應して入社する者一時は頗る多かるべきも、社員はたゞ費用を寄附するのみにて、直接には少しも利益の配當を受くることなく、而して其社の目的とする所の開鑿の成功の期は遠く數十年の後に在りと言はゞ如何ん。非常に忍耐なる社員に非らざるよりは皆追々脱社するに至らん。此の如くんば其措置、非常に宜しきに非らざるよりは其會社の久しからずして解散するに至らんとは自然の勢なる可し。此比喩にして大に不當ならずば、假名の會、羅馬字會の失敗せしも無理ならざるなり。前記の比喩を一層明白ならしめんが爲めに圖を以て之を示さん。

思想道新舊線路圖


漢字交道
羅馬字道
新字道
假名道
薩市沢
高サキ
大井川
カケ川
シヅ宮
沼ヅ
マヒ坂
ハマ松
ハマナ湖
ハコネ
大イソ
下田
京都
東京

思想道新舊線路比較圖に於て、太き線は東京、京都間の舊道にして、以て漢字交り文に喩ふ、其のうねりたる所は、以て旅行の困難、漢字の不便を示さんつもりなり。又其の中、二重線は假名文の新道、……線は羅馬字綴りの新道なり。舊道の延長百三十里、假名道は六十里、羅馬字道は五十五里なり。舊道の旅行には日數十三日、旅費十三圓を要し、假名道は日數六日、旅費六圓、羅馬字道は日數五日半、旅費五圓半を要す。

假名道の開鑿費は百万圓、羅馬字道は凡そ五百万圓を要す、假名道會社は二十万圓を集め得て東京静岡間の工事を遂げたるも資金續かずして解散し、羅馬字道會社は資金百万圓を集め得て薩市澤(一に雜誌多とも書す)停車場迄の工事を爲し資金續かずして是れも亦倒れたり。

其後數年の間は、新道開鑿の事は之を言ふ人もなく、舊道辯護論は全勝を占めたる狀態なりしが、近頃に至り、更に新字論者なる一派を生し、新道論は再び

世人の注意を引くに至れり。此の一派が主張する所の線路は圖に於ては――線を以て之を示せり。此の線路の長さは四十里にして、旅行の日數は四日、旅費は四圓にて十分なりと云へり。然れとも其初半の工事、非常に困難なるを以て、開鑿費は割合に巨額を要し、假名道の十倍、羅馬字道の二倍(即ち一千萬圓)を要すと云ふ。殊に羅馬字道の方へは外國人の寄附金も多かるべき見込みありしも此の新字道の方には外國人の寄附は望みなし。政府の力を借らずして此の論を實行せんとは頗る難事たるべしと言へり。要するに新道の線路は識者間の議論も未だ一定するに至らず、まかのみならず、世人の多數は今尚ほ通行不便の舊道を以て無上の良道路と心得、新道論者などの言ふ所は耳にも入れざるの有樣なれば、新道論者の困難も誠に察すべきなり。然れども此の新道こそ實に我國民が未來永遠其の恩澤を蒙るべき至便至良の街道たるを知らば、新道論者たる者何ぞ多少の辛苦を辭せん。明治維新の大業は多くの困難を經て成就せられたり。文學の維新も亦多くの困難の後にこそ成るべけれ。一時の失敗により て沮喪すべきに非らざるなり。本年九月二十日の東京日々新聞を見るに左の言あり、曰く、

「淀川改修の工費一千万圓とは其巨額驚くべし、平生巨利をなすものは又巨費を伴ふ、天下の通例なり」。

と。予以爲らく、此言移して文字改良の事業に適用すべしと。

○第五　文章改良の順序、假名奬勵案

文章改良の第一段は矢野文雄氏が論ぜし如く、普通書、文學書の區別を爲すに在り。同氏著「日本文躰文字新論」中に曰く。

「世上の文書を二種に別ち、其の一を文學書と爲すとにて、其の狀は恰も猶ほ英國抔に於て文學書(リテラリイ、サガルク)と普通書(ポピユラル、サガルク)とを區別するが如くすべきなり(中略)。今左に普通書と文學書との區別に付其の例を揭くべし。

○普通書の部類

一　政府の布告及び布令、布達、訓狀の類

二　公私學校に用ふる教育書の類

三　廣く人に讀ましむるを主とする新聞誌の類（但し專門の雜誌類を除く）

四　日用の手紙類（是の事に就て別に論あれども先つ一般の部類上より此處に入れたり）

○文學書の部

一　稗史小說の如き遊戯書の部類

二　高尚の專門課の論文及び專門書の類

三　普通書以外なる一切の史類傳記

尤も右の區別は唯一通り文書の性質を定めたるものにて、縱令ひ文學書の部類に屬する性質の高尚の書なりとも、若し其の著者が廣く世人に之を示さんことを欲せば其の事柄は如何程に高尚なるも常用の文字、文脉を用ふるときは其の書は則ち普通書と同樣に廣く世人に讀まるゝは勿論なり。云々」。

普通書に就き矢野氏の主張する所は（一）漢字の數を限りて用ふると、（二）漢字には悉皆振假名を施すとの二個條なり。

右二個條の內漢字の數を限るとは言ひ易く、行はれ難し。予は之に代ふるに「脉言と用言（但し語尾は言文不一致にて可なり）とは成る可く談話語と一致せしむ可し」との個條を以てせんと欲するなり。加藤弘之氏の小學教育改良論も此の主意と大同小異なるが如し。然れども予は振假名附の文章を以て我國普通文の永制と爲さんと望む者に非らず、只之を以て後來更に大に進步するの段階と爲さんと欲するのみ。

予を以て之を見れば漢字は早晩普通文中より全く驅逐せざる可からず、併し此の大事業を成就せんには多くの段階を踏まんことを要す。其の第一段は即ち前に述べたる二個條（漢字には必ず振假名を施すこと、脉言、用言は成る可く談話語と一致せしむること）是なる可し。改良の第二段は普通文に於ては成る可く多く假名を用ふることを奬勵し、分語の制を定め、語と語とを分離して書すること是なる可し。

假名をして普通文中に勢力を得せしめんとするには假名の短處たる「讀み下し難きと云ふと」を成る可く減少するの方法を講せざる可からず、之を講究せば其方法種々ある可しと雖とも予が「桃太郎の話」に於て用ひたるは分語法の外に左の四ヶ條なりとす。

假名奬勵案

一、て、に、を、は　は上の語に續けて書き、點を打ちて之を分つこと。

二、一語にして七字以上なるとき、或は六字以内なるも熟語なるときは適宜の塲所に於て分割點を打つこと、例へば「よろこび、ました」「ひろひ、あぐる」等の如し。

三、かーう、けーう　の如き引音、しーや、しーよの如き拗音は結合線を以て二字を連結し、きゃう、しょうの如き拗音を引きたる音は中の字を右傍に小く書くこと。

四、文句の初め及び固有名詞の初めの文字は大字（西洋の頭文字の如きもの）を用ふること。

右四ヶ條の外に今一つの工夫は、助辭以外の語にして假名にて綴りたるものは成るべく其左傍に單線を施して以て語の境界を示す事是なり。此法は、たゞ漢字を割合に多く交へたる文章に用ひて便利ならん。今左に其の一例を掲ぐ。

貝原益軒

諫言

およそ、人を諫むるには法あり。たとひ、わが子、わが弟をいさむるにも、聲をあらゝげ、言をあらくして、惡口し、はづかしむるは惡し。かくすれば、きく者、はら立ちうらみて、心に服せず。かへりて、其のいさめにそむきて從はず。こゝを以て、人をいさむるには、心を平和にし、詞をすなほにし、道理を正しくいさむべし。まづ人のよき事をほめて、人の心をよろこばしむべし。いかりてよろこばざれば、いさめても、うけ用ひが

たし、これ、人をいさむるてだてなり。（大和俗訓）。

○第六　文章改良の結局。新國字の見本及び假名の會の再興

文章改良の結局は予を以て之を見れば横書きの假名文是なり。横書きと爲すには從來の假名の字形を少しく變化せざる可からず。近頃世間に八釜敷く新字論者の論する所は即ち是なり。新國字を製すべしとの意見を始めて世に公にせしは井上博士（明治廿七年四月の東洋學藝雜誌）にして新國字の見本を始めて世に示せしは木村鷹太郎君（明治廿八年六月の教育時論）なり。予も亦木村氏に倣ひて試みに新字を製したれば世人の笑ひをも顧みず此處に記載して新字論者の參考に供す。

然れども新字を製作して之を天下に行ふの事たる難事中の難事にして之か實行を見る迄には今後幾多の歳月を要する事なるべし。且つ予の見る所にては新字

實行の前に我國文の是非とも踏まざるべからざるの段階は實に縱書きの假名文なり。是れ舊假名の會が主張せし所のものなり。縱書きの假名文行はるゝに至らば其れより横書きに移らん事は左程困難なる事には非らず、隴を得て蜀を望むは是れ人情の常なればなり。たとひ一歩を讓りて横書き迄に進まずとするも、普通文より全く漢字を驅逐するを得ば足れり。「大慾は無慾に似たり」との諺も亦味ふべし。前に新道開鑿の比喩に於ても述べたるが如く、新字道の工事は非常に難し。假名道會社の力を借らずして別に一社を組織せんとするも、多數の社員は得らるまじ。故に予は新國字を以て改良文字の理想と爲すにも拘はらず、其の階梯として假名の會の再興を賛成せんと欲するなり。

或人曰く「一旦亡びたるの假名會、之を再興せん事は新字論の實行よりも却つて難かるべし」と。予以爲らく然らず、假名の會滅亡以來假名の會が主張せし所の主義は頗る實行の緒に就きたり。其會亡びて其主義は亡びざるものと謂ふ

べし。且同會滅亡の一原因たりし國學者の頑固と云ふ事も近頃にては餘程柔らぎたるべく、又舊羅馬字會員中にても眞に國家を思はん人々は必らず假名の會に加はる可く又當時の新字論者中の思慮ある人は勿論假名の會の爲めに盡力せん。故に予は新字論の再燃を機として假名會の再興を計り、文字改良の事、文躰改良の事、言語統一の事等に關する議論を假名會雜誌上にて現今普通の文躰にて見ん事は世人の熱心に希望する所にして、又實に今日の急務なる事を信ず。明治の維新は勤王主義即ち復古主義によりて成就せられ、實行の後二十三年を經て立憲政躰の美菓を結べり。文字の維新も亦國字主義即ち假名文主義により て成就せられ、實行後二十三年を經ば或は新字實施の美菓を結ばん。語に曰く「尺蠖は伸びんが爲めに先づ縮む」と。又曰く「急がは宜しくまはるべし」と。改良論者たるもの宜しく此二諺によりて其の手段を講究すべし。

○第七　言語文章研究會の組織

前章に於て予は假名の會再興の望みあることを述べたり。然れども其の會名の如きは新たに之を定むる方、或は可なるべし。予は今假りに之を言語文章研究會と呼ばん。

さて此の新たに組織すべき言語文章研究會の主義要領は

(一)我國の普通文を平易にするの方法を研究すること

(二)我國の普通文として漢字交り文を用ふることを廢して、假名文字若くは他の表音字のみにて綴りたる文章を以て之に代ふるの方法を研究すること

(三)口語と文章とをして相接近せしむるの方法を研究すること

(四)國語を統一するの方法を研究すること

等なるべし

而して其の機關として言語文章研究會雜誌を發行すべく其の雜誌中には

(一)論說　(二)新躰文章　(三)口語上の語法の調査及標準語の調査　(四)雜

錄（五）雜報（新聞文學細見及び雜誌文學細見をも含む）（六）批評

等の數欄を設け、會員のみならず、會員外の人にも廣く之を讀ましむるの方針を執る可し。即ち第二欄なる新躰文章の外は世人に最も讀み易き文躰を以て之を記すべし。是れ其會の維持を容易にし且つ其主義を天下に弘むるの好手段ならん。

◎第八　假名遣ひに就きて

假名遣ひを以て同音の語を區別する事は今の漢字交り文に於ては殆んど用なしと雖とも假名文實行の曉には其の必要なる事は言ふ迄もなし。英語の假名遣ひは我國の假名遣ひよりも數倍面倒なり。獨乙語の假名遣ひと我國の假名遣ひとは難易の程度大概同等ならんか。然れとも英、獨の綴字は英獨人には左程困難なるものに非らず。我國の假名遣ひ位は假名文を見習ひさへすれば勞せずして自然に覺えらるゝものなり。

予の見る所にては同綴異義の語は成る可く減少せんことを要す。其の一法としては、かは（川）、かわ（皮）、こひ（戀）、こゐ（鯉）、こい（故意）等の差異を作らば一層便利ならんと考ふ。又はな（花）、はな（鼻）、はな（端）を圏點若くは他の符號にて區別し同時に音調の差異をも示さんと欲す。

併し假名文實行、漢字全廢の方針定まらざる間は假名遣ひを以て生徒を苦むるは生徒の體育に害あり、假名遣奬勵の最良法は予の見る所にては生徒をして漢字を見ると漸く少く、假名を見ると漸く多からしむるに在り。即ち小學校の教科書は讀書科用の外は悉皆振假名附きとせば生徒は識らず知らず自然に眞正の假名遣ひを覺ゆることを得、生徒の健康上にも大なる利益あらんと思はるゝなり。

又世には假名遣ひを以て同音の語を區別するには及ばずと說く人ありと雖とも是等の人達は宜しく平文氏の辭書中 ko の部を開き見て熟考せらるべし。必ず

「コウ」「コフ」「カウ」「カフ」の外に尙ほ「コー」「コオ」「コホ」を增さんと思ふ程に至るべし。左は言へ、予と雖ども同音語を區別する等の功用なき假名遣ひまでも頑固に之を保守せんとするものに非らず。大混亂を生ぜざる限界內に於て多少の改良をば拒まざるべし。

○第九　文脉に就きて

我國の文脉に就き「時文二派」なる論文中に見えたる坪內氏の意見は甚だ穩當なるが如し。予の解する處にては、同氏の意は國語の純正を損せざる限りは多少の改革は拒まずと云ふに在るが如し。今同氏の作りたる純正國文の一覽表を左に掲ぐ。

- 純正國文
  - 格
    - 妥當なるを要す
      - 外國の語格を忌む
      - 一地方若しくは俗間のみに行はるゝ語格を忌む
      - 濫造の語格を忌む
      - 廢語格を忌む
      - 前例なき用語法を忌む
    - 精確なるを要す
      - 時の曖昧を忌む
      - 自他の曖昧を忌む
      - テニヲハのまぎらはしきを忌む
      - 係結のまぎらはしきを忌む
  - 語
    - (第一)國語
      - 地方語を忌む
      - 外國語を忌む
    - (第二)現に用ひられたる語
      - 廢語を忌む
      - 濫造語を忌む
    - (第三)名家の慣用せる語
      - 俚語を忌む
      - 訛語、濫用語を忌む

右のうち、格の部に「俗間のみに行はるゝ語格を忌む」とあれども「俗間」とは如何なる意味にや、若し口語のみに行はれたる語格を忌むと云ふ意味ならば予は其の少しく守舊に失するを感ず。予は從來口語のみに用ひられたる語格と雖ども古格よりも明瞭を增すの場合には自由に之を用ふることを許さんと欲す。

予の見る所にては文脉改良の結局は歐米の諸國に行はるゝか如き言文一致なり（此處に上田万年君著「國語のため」第八十七葉及び末松君著「日本文章論」第五編を參看せよ）。然れども急激の改革は國語の純正を損し古體の善き所までも併

せ失ふの憂あり。故に先つ文躰改良の第一歩として古文法の研究を奬勵し、和文躰に加味するに口語躰即ち言文一致躰を以てして新たに一の文躰をはじめん事を力め、第二歩として言文一致躰を奬勵して以て其の發育を促がし、言と文とをして漸次に相近接せしむるの方針を執ると最も穩當ならん。（「話し通りに書けば、全國の語が、一樣になるわけ及ひ國語が、うつくしくなるわけ」に就きては物集高見君著「言文一致」を參看せよ）。

左に掲げたる講談演説集第一冊の批評は明治十九年八月の東洋學藝雜誌（第五十九號）に出でたるものなるが、言文一致躰の功用を巧みに言ひ顯はしたるものと謂ふべし。

講談演説集　第一冊　編輯人　林　茂淳　發兌書林　丸善、瑞卯、石治

此書は外山正一氏の「漢字やぶり」、寺尾壽氏の「地球の位置」、杉亨二氏の「節酒會を贊成するの趣意」、加藤弘之氏の「社會外に道德なし」なる近時有名の四

演説を速記法にて書き取りたる儘にて載せたるものなり。

此書を讀むに第一に感する所は諸氏の説かるゝ趣意を解するとの非常に易き事なり。諸氏の述べらるゝ事の内には髓分難きともあれとも、此書にある如くにては兒童と雖とも解し得るならん。此理由を尋るに、畢竟我邦の言語は談話の躰が最も普通なるのみならず、最も進みたる躰にして意を通するに最も適したるが故ならん。其證據には人と對き合なれば髓分込み入りたるとも其人に了解させるとも出來、言語も左程不足には思はねども、同じ事柄を文章に綴り或は書翰に認めんとせば十人の内八九人迄は文字に筆を束縛され、云はんと思ふ趣意よりも言語の方が主になるもの多きが如し。格別新き事を述んとするに人々最も此不都合を感ずるなり。然るに此演説集は我言語の最も進みたる躰、即ち談話の躰を取りて記したるものなれば、其意の解し易く讀み易きも亦理あるなり。我輩の願ふ所は爾後諸先生の著述には此文躰を盛

に用ひられんとなり。今の世にては文章家の外は到底言語に拘泥するの暇なし、自己の意が通じ、人の云ふ所を解すれば夫にて足れりとせざる可からず。歐米諸國に好良なる書物の多く出るは他の理由もある可しと雖も一は書くとの容易なるに由るなるべし。

第二に感する所は此書に用ひたる文躰は演説者一個人の性質を能く現はすとなり。固より如何なる文躰にても其記者の性質を現はさぬものとてはなしと雖ども漢文躰或は書翰躰にては卓絶の文章家はいざ知らず、普通の人にては多少定りたる式によりて記すを以て十人が十人、記す所同樣なる處多く、一個人の性質を現はすと難し。例へば現今親友の間に往復する書翰を見るに面を對すれば寢轉びながら戲を話し其友誼云ふ可からざる貴き情を含むの間柄と雖ども互に書翰をやりとりすれば定りの「拜啓」或は「一筆啓上」より始め、其語氣實に隔絶したる間柄の如し。之を歐米人の親友の間にやりとりする書

翰と比すれば恰も役目上にて記じたる公の文かと思はるゝばかりなり。即ち英語にて所謂 Cold formal letters と云はざるを得ざるなり。然るに此演説集の文躰は云はゞ寢轉びながら談話するときの躰を存し能く演説者の性質を現はせりと云ふ可し。我輩幸に上に名を擧げたる四先生と交を辱ふす。此演説集を讀むに當り諸先生の常に用ひらるゝ言語語氣充分に存し居りて諸先生の姿は殆んど眼前に出現し、成る程此の處にて此先生は胸を打ちたらん、或は額の汗を拭ひたらん、或は講臺を左右に歩みたらんなど細き事をも想像するを得る程なり。

第三に此書の如きは我々の談話に用ゆる言語文章を改良するの一助となるべし。現に上に擧げたる四先生の内にて嘗て自己の爲されたる演説の筆記を見られ「エー」とか「ウーン」とか「コイツ」とか云ふ語の餘り度々あるを見られ、「まさか余の談話は此の如きものにはあらざりしならん」と云はれたりと。此

の如き大家にても自己の語に驚かるゝ位なれば尋常の者の談話は實に不充分なることと知るべきなり。談話の躰を筆記の寫眞に寫し其缺點を示すは、益々之を改良發達せしめ遂に我が邦人中に眞の雄辯者を出すの一助ともなるべきなり。（以下略す）。

K.　M.

◎第十　國語の統一

同しく日本國にてありながら東西南北言語相通せざるは不便の極なり。殊に內地雜居も實行せられんとするの今日、國語の統一を計らざるは不覺是れより甚しきはなし。今國語の統一を計らんとせば小學校の教科中に談話科を設くると を以て第一の手段とすべし。即ち讀書の時間の一部を割きて之にあて其時間には專ら標準語の練習を爲すなり。談話科の教科書は言文一致の假名文（若くは漢字の極めて少き文）にて書きたるものを用ふ可し。即ち「言文一致桃太郎の話」の如き文躰の書物を用ふべし。此くの如くせんには言語の統一を助くると同時に

假名文の奬勵ともなり、普通文を平易にするの點に於ても其功用少からざる可し。

讀書科の內、文章科とも名づく可き部分の用書としては、予は東京府教育會の調査したる意見を以て時世に適するものと考ふ。

小學讀本編纂要項

（東京府教育會調査）

一、用語　普通なる日本語（普通談話に用ふる語）を撰び俗語にても穩當なるものは之を採り十分に國語上の過謬を訂正し北は占守島より南は臺灣に至るまで言語の統一を保ち以て國語の基礎となさん用意あるを要す。

二、文章　文章と言語とは自から同じからざれば盡く言文一致とするを得ざれとも兩者をなるべく近接せしめんことを要す。特に初二三年は語を主とし、次は語と文とを融合せしめ所謂普通假字交り文とし、又手紙の文を從來よ

りも多く加ふべし（句讀も亦等閑にすべからず。）

普通假字交り文は通して貝原益軒、室鳩巣、新井白石等の書きたる文の平易なるものを度とせは可なちん但現今の高等三四年級の年齢に至ては稍〻現今通用の官府文（論說文）中古體文（和文）との區別あらしむへし

總て讀本の文章は之を讀みて朗々餘韻ある語句を上とす特に剛壯なるものと流麗なるものとを取り浮華にして虛誇なるは決して取るへからす而して猶朗讀法の方則を適用し得るものなるへし

三、文字　文字は片假名、平假名、漢字を用ふへきは勿論なれども漢字は凡二千字を限り最も普通なるものを用ひ人名地名必す傍訓を附すへし

四、事項　初級にては兒童の日常關係あるものを取り大人の行爲思感にして兒童の想像の及はさるものを入るへからす實物若くは挿入せる圖畫より其思想を導き稍〻進みては物語（昔語）歷史、地理、理科等に屬するものを廣く採

入し特に外國と關係ある事實を擧け日本國、日本人の觀念を強くし猶國民對立の思想を與へ（外國人に對して自重自立を勵ますへき材料を具へ又海事尙武實業獨立堅忍進取の條項を缺くへからす其他國德を發揮することは勿論なりかの事項を排列する順序の如きは思想の深淺と思想の聯絡或は轉換に注意し讀む者をして甚だしき困難倦厭を感せしめさらんことを期すへし。（以下略す）。

（敎育報知第四百九十三號）

◎第十一　語法と文法との區別

我國の現時の如く口語と文章と異りたる時世に在りては、文法の外に語法の研究必要なり。然るに、世の中に文法書は多くあれとも、語法書は殆んど皆無なるが如し。之を書かんとする愛國者はなきか、（此處に早稻田文學第九十七號に見えたる「關根君の語法私見を讀みて」なる高津鍬三郎君の論文を參看せよ。）

○第十二　文字改良と皇政復古

文字改良の事業は皇政復古の頃末と頗る相似たり。今試みに兩者の相類似せる點を對比すれば左の如し。

皇政復古――文字文章の改良〔(一)文字は意義をうつす爲めに非らずして音聲をうつすために用ひ、(二)文章は言語の儘をうつすと云へる古代の主義に復歸すると〕

漢字の採用――政權武家に移る

承久の役及び建武の中興――假名の會及び羅馬字會の勃興

護良親王、北畠親房、日野資朝、日野俊基、楠木正成、藤原藤房、新田義貞、兒島高德、名和長年、楠木正行、新田義興等――有栖川威仁親王殿下、鍋島直大、西周、外山正一、矢田部良吉、神田乃武、大槻文彥、後藤牧太、末松謙澄、松井直吉、山川健次郎等の諸君

德川幕末の勤王攘夷論――國字論の再燃（明治二十七年ヨリ）

德川光國、高山彥九郎、蒲生君平、岡部眞淵、本居宣長、平田篤胤、頼山陽等――井上哲次郎、加藤弘之、上田萬年、大西祝、木村鷹太郎、岡倉由三郎、岡田正美等の諸君

薩長土肥――文字改良實行家〔文字改良の薩長土肥は未だ之を明言し難し。予の大に望を屬する所の者は(一)進歩主義の文學者、(二)遠見ある教育者、(三)思慮深き洋學者、(四)熱心なる言語學者等なり。〕

○第十三　文字改良の過去、現在、未來

文字改良問題の世に現出せしは今より十餘年前の昔時に在り。其當時即ち明治十年代に於て此問題に就きての學者の意見を大別すれば左の如し。

(甲)假名論者　漢字を全廢し舊來の假名を以て之に代へんと主張す（大槻文彥君等）

(乙)羅馬字論者　漢字を全廢するとは甲派に同意なれども代用の文字として

は羅馬字を採用せんと主張す（矢田部良吉君等）

（丙）漢字削減論者　漢字の數を制限して之を用ひんと主張す（矢野文雄君等）

（丁）守舊派　漢字を全廢するとは勿論漢字を削減することにも反對す

右四派當時の勢力を想像して表にて示せば左の如し。

（一）文字改良主義
- （イ）漢字全廢
  - （甲）假名論者……3
  - （乙）羅馬字論者……2
- （ロ）漢字削減……2

……7

（二）守舊主義……10

右の表に就て之を見るに文字改良派合同の力は7にして守舊派の力は10なり。故に改良派相合從して守舊派にあたるも尚ほ勝算は立たざりしに各別に運動したるは是れ其の久しからずして共つぶれを爲したる所以なるべし。

右は過去即ち明治十年代の文字改良論の形勢なり。然らば現在即ち明治二十年代の文字改良論の形勢は如何ん。予の想像する所を表にて示せば左の如し。

（一）文字改良主義
- （イ）漢字全廢派
  - （甲）假名論者……5
  - （乙）羅馬字論者……3
  - （丙）新字論者……1
- （ロ）漢字削減派……3
- （ハ）文字文章研究派……3

……15

（二）守舊主義……11

右の表に就て之を見るに文字改良主義の五派若くは四派相合從して守舊主義にあたらば前者勝利の望みあるも若し是等の合從纏まらざるに於ては改良諸派の復た久しからずして共つぶれを爲さんとは必せり。此の時に際し改良論者の最

も注意すべき箇條は蓋し左の如くならん

(一)度量寛かるべし
(二)剛毅なるべし
(三)忍耐なるべし
(四)己れに克つべし
(五)兵法を講ずべし――合從の策、人心を皷舞するの策等

右は現在即ち明治二十年代の文字改良論なり。然らば未來なる明治三十年代の文字改良論は如何ん。予の想像する所を示せば左表の如し。

(イ)音聲字採用派	(甲)進歩主義の假名者流	7
	(乙)假名主義に助力する羅馬字者流	5
	(丙)假名主義に助力する新字者流	6
		18

(一)文字改良主義	(ロ)頑固なる假名派	2
	(ハ)孤立せる羅馬字派	2
	(ニ)漢字削減派	2
	(ホ)文字文章研究派	5
		17
(二)守舊主義		

右の表に就て之を見るに羅馬字者流及新字者流にして度量寛き人は進歩主義の假名者流と運動を共にするの氣運に達し、此に三派の合從は成り、此に始て、漢字全廢主義の全勝に歸し、文章の大改革は行はるべし。普通教育は此時より長足の進歩を爲さん、日本人の體格、日本人の道德は此時より著しき改良を見ん。

右は來るべき明治三十年代の文字改良事業なり。然らば其後に來るべき文字改良の結局は如何ん。予の想像する所にては左表の如し。

日本文字
- (一)新國字（舊來の假名を少しく變更して横說に便ならしめたるもの）……10
- (二)羅馬字（尋常小學の第三年期より之を始む）……4
- (三)舊來の假名（尋常小學の第四年期に於て之を課す）……3
- (四)漢字（高等小學の第一年期より之を始む）……1

右の表に就て之を見るに日本文の主權を握るものは新國字なるも、羅馬字及び其他の文字も亦行はれざるに非らず、恰かも獨乙等に於て獨乙字と羅馬字と並び行はるゝが如し。故に羅馬字文の書物も假名文の書物も、又漢字交り文及び漢文の書物も行はるべし。表中の數字は此等各種の文字の用ひらるゝ區域の廣狹を示せるなり。

右は文字文章改良の終局に來るべき歸着點なり。此點に達するは多分今より百年の後たるべし。此の點に達するの時期を早からしむるも晩からしむるも皆なる學者の努力如何に在り。學者の責任また重からずや。

○第十四　文字文章改良論者に勸む

文字文章の改良は百年に亘るべき繼續事業なり。故に之に關する論文は成る可く之を書物となして後世に遺さん用意あるべし、雜駁の事柄を集錄せる雜誌に出したるのみにては、たとひ名論卓說と雖ども其功用はたゞ一時にとゞまらん。是れ誠に惜むべきの事たり。予之を聞く、「今より二百五十餘年前、日光廟の造營あり、其際諸大名の互に競ふて種々の寄進を爲したりし中に松平正綱は杉苗數万本を献納して通路の兩側に植えたりければ當時の人其の寄附のけちなるを笑ひたりき。然るに二百五十年後の今日參詣者が見て以て見事なる並木と爲す所の者は實に其當時嘲笑を蒙りたるの杉苗にして今日世人の益を爲すとは他寄進の遠く及ばざる所なり」と。今の文字改良論者及び文章改良實行家の勞力も頗る之に類するが如し。論者及び實行家たるもの夫れ二百五十年後の結果を想像して以て自ら慰むる所あれよ。

○第十五　新文躰を世間に普及せしむる一方便

新文躰を世間に普及せしむる方便に就き末松君が其著日本文章論に陳べたる所は予の深く同意を表する所なり。同書第五編の末段に曰く。

書方の詳細は、假名羅馬字兩會の爲め、なほ大に論すべきものあれば、特に之を次編に讓り本篇は兩會の爲め、一の注意を喚起して之を結ばん、他なし、通俗昔話本の出版是れなり、今や兩會とも、各、雜誌を發行せり、雜誌の發行、固より可ならざるに非らず、新躰の文を創むるに方ては、最初は其の適否を試驗する爲め、雜誌を發行せさる可らず、將來とても、高尚の思想を論出する爲めには、猶大に必要あるへし、去れとも新體をして、世間に普及せしむる、方便上より考れは、雜誌發行は、未だ充分なりとするに足らず、必らずや今の社會は、兒童をして、識らず知らず、新體の中に、生長せしむる工夫を、なさゝる可らざるに似たり、歐羅巴諸國に於ては、兒童の爲めに發行の昔話

類の書籍、極めて夥しく、價も廉にして、其體裁は、年齡に應して、自ら差違あり、多くは皆挿畫本とし、兒童をして繪を玩ふと共に、自ら字を覺え、書を愛するの情を發せしむ、故に敎育の助をなすこと、極て大なり、就中日耳曼にては、グリム氏兄弟の合纂せし昔話本は、最も廣く行はれ、印行も大小あり、挿畫せるもあり、せざるもあり、記する所の話は、我國の舌切雀、兎と狸、桃太郎の鬼が島征伐の類と、甚た似たり、蓋しグリム兄弟は歐洲にて「比較言語學」の、祖宗とも仰るゝ大學者なれとも、言語の佳所は、却て老婆老媼の口碑に存すること多きことを悟り、其事業の淺薄なる如く見ゆるをも厭はす、鋭意して、民間の昔話を採錄し、詞藻の足らさる所は、之を補ひ、以て彼書を作りたるなり、其意蓋し兒童を識らす知らさるの間に、美文に敎育するに在りしと云へり。日本にても、上に云ふ舌切雀桃太郎類の昔話は、已に印行の繪雙紙少らず、若し其粹を撰び、文字の未だ佳ならざるを修飾して、新體に

綴り、美畫を加へ、美本を製し、低價にて發賣せは、其功用は甚だ大なるへし、其外王代にありては、今昔物語、著聞集、徒然草、近世にありては、責而者草、心學道話等の書もありて、其の中には、隨分の好話もあれは、古風に過る字句だけを修飾し、之を拔萃するも甚だ好し、又舌切雀類の昔話の、老婆の口碑に存せるもの、中には、思想の美を盡すもの少らず、予の幼なるや、家に一の裁縫婆あり、此婆素性も無下に賤しからす、善く昔話を語るに長ず、予が當時聞たる好話は、今も猶恍惚として、心頭に往來すること屢々なり、以て小話の、幼心を感ずる多きを知るべし、此等の昔話は、グリム兄弟に倣ひ、有志者の宜しく收拾すべき所と思はる、且つ繪本類の、幼年者に裨益あることは、泰西の教育家も之を說く、予も亦自ら記す、予の八九歲前後に當てや、習字は、元より大嫌にて、近隣の兒童を指麾して、僞戰を爲すにあらざれば、則ち犬を野外に逐ひ、弓を林間に射る等の、惡る遊び勝なりしも、幸に家に

繪本豐臣勳功記あり、內に在る時は、是れを母氏の膝下に、翻閱するを樂となしたりき、後來予の敎育は、此に濫觴すること少からず、亦以て繪入本の、有用を見るに足る、故に予は切に繪入本類の發行を、綴字熱心の諸君に望む、新躰文章の成功、亦蓋し斯に在ること多し。

予新文躰普及の方便として通俗昔話本出版の必要を感ずること久し。昨年の夏、試みに桃太郎の古話を言文一致躰に綴りて見たれども未だ遽かに之を出版するの意なかりき。同年の冬に至りて末松君著日本文章論を得て之を讀み、右に拔萃せる一節に到りて思はず案をうちて曰く、「是れなり、是れなり」と。乃ち前に綴りし古話を修正して之を出版せんことを決意す。爾來公私の事務繁多にして早速之を出版すること能はざりしにも拘はらず、終に素志を放棄せざりしは偏に末松君の賜なることを感ず、而して予が淺學不才をも顧みず敢て文字文章改良論を著はし以て後進者に益せんと企つることも實に此處に濫觴せしことを明言す。

○第十六　教育上に於ける童話の價値

（此篇は去る明治廿五年十一月靜岡縣教育新誌第壹號に掲載したるものなるが文章改良の事業にも頗る關係あるを以て之を少しく修正して此處に挿入することゝなせるなり。讀者乞ふ、其心して讀みたまはれよ）

童話とは獨乙語の「メルヘン」なる語を譯したるものにて少兒の爲めに作りたる物語を云ふ。即ち我國の昔話桃太郎の話、舌きり雀の話、猿蟹合戰の話、花咲爺の話、浦島太郎の話、かち〳〵山の話、鼠のよめいりの話、俵藤太の話等の類なり。獨乙國にては小學校の最下級に於ては專ら是等の童話なるものを教授し教師之を談じ生徒にも之を談ぜしめ、國語の知識、自然界の知識、習字作文算術の技能等皆之によりて得せしむるの仕組に成り居るとのこと也。世の教育家中假作物語の功用を輕視するのみならず、或は有害のものとして之を排斥するものあり。文部省出板の尋常小學讀本中桃太郎の話、猿と蟹の話等を挿入せ

るを見て之を非難せし人もありしやに聞けり。教育上童話の必要を論することゝ亦無用にも非さるべし。

兒童は極めて想像力に富むものにして犬も雉も猿も蟹も蜂も卵も臼も皆人間の如き有情の者なりと想像して少しも疑はず、此の想像力は其の向ふ所の方向によりて或は有益となり或は有害となるが故に教育家は常に之を有益なる方向に向けんことを力め、且つ大に之を利用することは甚だ肝要なりとす。

今幼兒の想像力を利用し幼兒をして善を愛し惡を惡むの心を發達し自然に道德上の觀念を得せしむるには童話の上に出るものなし。童話中の人物は善なる者は非常に善に、惡なる者は非常に惡なり。故に兒童の心にも容易に善を認めて之を愛し、惡を認めて之を惡むの情を發するに至らしむ。而して幼時に於て發したる此の情は後來生徒の品性上に大なる勢力を有するものにして成長の後幼時學びたる童話は全く假作なりしことを知るに至るも決して磨滅するものに非

ざるなり。

獨乙の所謂童話なるものは教訓物語の如きかたくるしきものに非らず。教訓物語は皆な勸善懲惡を目的として作りたるものにして、兒童の想像に適するを目的とせざるが故に、温良なる兒童の外は多くは之を嫌惡するもの也。童話なるものは勸善懲惡は其第一の目的とする所に非らず。兒童の想像に適合することを其第一の目的とするが故に兒童は深く之を愛し幾度之を聽くも決して倦厭することなく、知らず識らず其の中に含蓄せる所の道德によりて感化さるゝに至るなり。

前にも述べたるが如く獨乙に於ては小學校の最下級に於て童話を用ふることなるが其用ふる所は皆な「グリム」氏の童話とて獨乙國有名の文學者グリム氏の作れる者なり當時獨乙の小學校に於て多く用ふる所の童話は左の十二なりと云ふ

(一)星拾ひ少女の話　(二)甘き粥の話　(三)ホルレ女の話　(四)藁と炭と蠶豆の話　(五)七疋の小山羊の話　(六)牡雞牝雞の話　(七)狼と狐の話　(八)ナラズモノの話　(九)ブレーメン町音樂師の話　(十)鶺鴒と熊との話　(十一)「フィンデ、フォーグル」の話　(十二)貧乏人と富限者の話。

今左に予が同窓本莊太一郎氏著歷史教授法中の一話を借りて童話の性質を明示せん。

星拾ひ少女

或る時一人の少女ありけるが、はやくより双親に死に別れて貧苦の中に人となれり。もとより住むべき部屋もなければ、寢るべき寢床もなく、唯身に着けたる一重ねの着物と、或る慈善者が施し與へたる一片の麵麭の外には、我物とては、一つもなき、あはれはかなき有樣にて、世をば過ごしけり。されど此少女は、生れつき極て善良にて、少しも物爭ひなどすることなき、從順なるものにてありければ、かく世の中に捨てられたる身には、神より外に頼

るものなしと思ひて、唯一心に神をば念じながら、或る野原を行きけるに一人のいとも憐れなる男に出遇ひたり。彼の男、予れいたく飢ゑぬれば、何なりとも食ふべき物を賜はれよと乞ひけるに、少女は、さらばとて、己れの持てる一片の麵麭をば與へたり。「これは神の賜ものならめ」と云ひつゝ、其男遠く行き過ぎぬ。既にして病み衰へたる少兒、又た少女の前に來りて、予の頭は甚だひえたれば、何にとぞ覆ふべき物を給はれと云ふ。少女は、さらばとて、又た己れの帽子をば脱ぎて與へたり。夫より一里許りも進みたらん頃、またも一人の小兒に出遇ひぬ。見れば外套をも着けずして、いたく寒さに堪へ兼ねたる樣子にてありければ、少女は自身の外套を與へたり。夫より遠く行きけるに、又も上衣を乞ふ者ありければ、又たまた之をば與へたり。夫れより少女は森林を通りかゝりけるに、日は漸く暮れて、やみよとはなりぬ。此處にてまた〳〵襦袢を乞ふ者に遇ひぬ。この從順なる少女は、やみよのことなれば、人目を憚ることも要すまじと思ひて、遂に一枚の襦袢をば脱ぎて與へぬ。少女は最早其身に一物をも着けず、裸體のまゝにて立ち居けるに、俄かに天より許多の星降り下れり。よく〳〵見れば、こは如何に。星にはあらで光りかゞやきたる銀貨にてありけり。少女は又た何處よりか、先きに脱ぎ與へたる代りに、新しき美くしき襦袢を得たり。依つて少女はその銀貨をば拾ひ集めて、豐かに一生を送りけるとなん。

此の童話により、彼國の宗教に於て最も切要なる、如何なる貧苦の中に在つても、仁惠を盡すことを忘るべからざること、神を信仰することを怠るべからざることゝ、此の如き善行をなすものは、神之を見捨て給ふものにあらずとの實行的格言を、最も深く印象せしむるを得べきことは勿論、又た之よりして貧苦の情態、家族の模樣、更に原野森林の如き地理上の觀念、人間必須の衣食住に關する物品の知識をも得せしむべし。云々。（歴史教授法第十八節）

（又「鷦鷯と熊との話」は本庄氏譯俄氏新式教授術第百八十九葉より第百九十九葉迄の間に在り同書に就て見らるべし。）

グリム氏童話の性質は「星拾ひ少女の話」にて畧ぼ分かりしならん。先づ日本の昔噺と見て大なる誤なかるべし。依て以下獨逸の教育家が是迄論したる處に基きて童話の功用を略述せん。

凡そ如何なる善き教へと雖ども兒童の腦髓に入り難きものは兒童の教育には其の益甚だ少し。忠孝の教へ善からざるに非らざれとも抽象的に之れを生徒の腦髓に注入せんとするは蓋し勞して功なきことと謂ふ可し。

譬へば飯を以て赤子を養はんとするが如し。飯善からざるに非らず、其赤子の胃に適せざるを如何にせん。赤子を養ふに母乳を以てするが如く、幼兒の道德を進めんには童話の如き想像的の事柄に優る者なし。童話中の人物には其名なく、又事件には時日場所の關係なし。是最も兒童の腦髓に入り易き所なり。且童話

はたゞに兒童の想像に適するのみならず、其中には又美術上、道德上の思想及格言等をも含蓄し、又生徒をして道德の判斷を爲さしむるに適す。道德判斷とは生徒をして童話中の人物の善惡邪正を判斷せしむることなり。例へば猿蟹合戰の話に於て猿の惡なること、卵蜂臼等の朋友を助けしは善なることを生徒自身に判斷せしめ、又桃太郎の話に於て桃太郎は父母に孝行なりしと、犬雉等は桃太郎に忠義なりしと等を判斷せしむるの類なり。若し斯の如くにして追々進むときは兒童は次第に自分の判斷力を信用するに至り、而して童話中にある想像的の事柄は假作なるを知るに至るも其教へし所の眞理は永く心に印象し其鍛錬せし所の氣質は永く變更することなかるべし。是れ決して實事のみを談することに依て得る能はざるの利益なり。若し學校の授業に於て實際の事實のみを談することせば、生徒はたゞに之を嫌ひ厭ふのみに非らず。其理解する所も極めて狹き平凡の事のみに止まるべし。

次に童話は常に兒童に有用の智識を授く、其の中に在る所の事物は皆以て自然界及ひ社會上の知識の端緒と爲すことを得べし、例へは猿蟹合戰の合戰を以て後日、戰爭を説明するの端緒となすを得べく、桃太郎の主從は以て君臣の端緒となすを得べく、桃柿は以て菓物の端緒と爲す可く、鬼は以て怪物の端緒と爲す可く、柿の種より柿樹を生すると、其の花を開き、實を結ぶこと等は以て植物學幷に農業の端緒と爲すを得べし。此の端緒と云ふとを一寸説明せんに端緒とは之を基礎として新知識を授くると云ふ意なり、例へは東京の大さを兒童に知らしむるに其の住居せる町村の何倍と云へば是れ其の町村を以て東京を知らしむるの端緒と爲したるなり。又戰爭と云ふ觀念を生徒に得せしむるに「あなた方は猿蟹合戰の話に於て合戰と云ふとを學びたるならん」と云ふて説き始むるは是猿蟹合戰を以て戰爭の端緒と爲したるなり。又怪物と云ふ觀念を得せしむるに「桃太郎の話にて鬼のことを聽いたゞらう、鬼の如きものが怪物である」と

云ふ樣に説き始むるは是れ鬼を以て怪物を敎ふるの端緒となしたるなり。斯くの如く生徒の既に熟知せることを端緒として説き始むるときは其の説明は分り易く、且つ生徒をして一種の愉快を感ぜしめ其の得たる新觀念も永く其腦裏に留まるものなり。

人或は曰く、成る程、童話は敎育上大に利益あり。然れども世人の熟知せる所のものなれば特更らに學校の課程に加へて之を敎へずとも家庭敎育に於て充分兒童の學び得る所なりと、是れ大に誤れる論と謂ふ可し、何となれば若し童話を學校の課程に加へて敎へざるときは成る程一部の兒童は家庭敎育に於て之を學ぶを得んも、一部の生徒は全く之を知らざるの不都合を生せん、且つ家庭敎育は至つて不完全なるものなれば童話を利用して兒童の道德心を養ふ等は決して望む可からざるとなり。然るに之に反して若し學校敎授に於て此の童話を敎へ之に連絡して諸種の知識を授くるときは之によりて生徒の注意を一點に聚むる

ことを得べし。現今我國通常の教授法にては讀書は讀書、作文は作文。習字は習字、算術は算術と云ふ樣に個々獨立せしめて教ふるが如し。若し之を獨乙風（ヘルバルト主義）にして先つ教師猿蟹合戰の話を談し、生徒も充分之を談し得るに至らしめて以て言語の練習を爲し、又「かに、さる、かき、たね、」より始めて追々文字を覺へしめ、又習字も「さる、かに」等の文字より習はしめ猿蟹等の實物標本若くは繪を示して之を說明し、以て理科上の知識を與ふる等諸學科皆此等の物語より發する樣になれば、生徒も容易に且つ面白く學ぶことを得るに至らん。人或は曰く、現今の規定學齡を滿六歲よりとするは早きに失す、宜しく滿七歲よりとす可しと。成る程、從來の教授法にては滿六歲或は早きに失するならん。然れども教員にして充分幼兒の授業法に熟達し生徒が喜んで學校に來る樣に教授せば滿六歲は決して早きとはなかる可し。先つ初級生徒は遊び半分、稽古半分と云ふ考へにて教授せば大過なからんか。詰め込み主義の幼兒に大害

あると吳々も注意あり度きことなり。

右に論する所は只獨乙教育家の所論を述べたるのみ。余輩とても直樣獨乙風に倣ひ日本の昔噺を小學校初級の課程に加ふべしと言ふには非らず。只余輩の望む所は教育家が昔噺及び其他の假作物語の類にも注意して充分其の功用を研究する樣に致し度きと及ひ他の諸國殊に獨乙國に於て假作物語がどれ程迄に教育上に利用されて居るかを承知してもらひ度きに在り。獨乙國にては「グリム」氏の童話の外に上級にてはロビンソン物語（たにもとめり）オデッソイス物語等の假作物語を用ふるとなるが此事に就ては谷本富君著「實用教育學及教授法」第二百二十一葉を讀まれんことを乞ふ。

次に佛國の教育家が童話に對する意見は如何にと尋ぬるに能勢榮（のせさかえ）君重譯根氏教授論第三卷に曰く。

（百四十七）說話。「カメト」氏は嚴酷にも說話は教育に無用なりとして排

斥せしと雖ども、是同意すべからざる說なり。蓋し說話は、兒童の精神に歡喜を齎らすものなり。而して歡喜は智力の衞生の一要事なり。加之說話は智力を振興するに功あり。「サリー」氏(英國の心理學者)が述べられし如く、家庭に在りて說話を聽くことを最多く樂む兒童は、學校に於ても必最良の成蹟を表はすものなり。(若し他の事情に於て他の兒童と異ることなしとせば)。然らば說話は恐るべきものに非らず。眞實に虛構に成りたる說話にても、或は中に德敎の意義を寓せず、其の好奇なる作話の裏面に毫も端嚴なる敎訓を隱慝せざるが如き說話にても。之を敎育上に有害なるものとして必しも恐るべきものに非らず。

「シャラメ」氏曰はく「兒童に談話を爲すとき、吾人は何故に單に彼等を歡樂せしむるのみの目的を以て爲さゞるか。兒童は其の想像力の爲に食物を懇望して止まざるものなれば、之を滿足せしむるが爲に、談話は只談話の爲めにするを以て足れりとす可きにあらざるか」と

然れども說話は單に兒童を樂ましむる爲めにのみ用ゐるべきものにあらず。若之を精選し、簡明、精巧、淸潔なる說話にして毫も陋惡卑劣の趣味を寓するとなからんには、是實に一層高尙なる効果を來すものなり。此くの如き說話は敎師は之を用ゐて兒童を喜ばしめ、以て注意力を或る一事に固着せしむる方法を得べく、兒童は之に依りて未來の學習に裨益するのみならず、此くの如き說話は何人も決して缺く可からざる詩歌の理解力を養ふに足る準備となるなり。

〔註〕ラボーレー氏は其著書中に述べて曰はく「人が想像談を喜ぶ奇情は、如何なる原因あるに依るか。虛妄の事が實事よりも却りて愉快なるに依るか。否然らず。想像談は虛妄にあらず。兒童が之を聞きて或は樂み、或は恐るゝ所のものは、決して想像談の爲に毫も欺かれたるにあらず。蓋し說

話は理想的なり、現實的眞實よりも更に眞實なるものなり。眞善美の勝利を示すものなり。

教育上に於ける童話の功用を一層明白にせんが爲め卷末に此事に關せる「ドクトル、ハウスクヲヒト」君の講義の筆記を英文のまゝにて添へたれば讀者乞ふ參看せられよ。

又童話及び少年書類の事に關し湯本武比古君著應用心理學第六十八葉より第七十葉まで及び「太陽」第八號に見えたる同君の論文「社會の教育」の末段をも參看せられなば又大に益する所あらん。

○第十七　外山博士の論文

（左に掲ぐる四篇は文字改良に關せる外山博士の明治十六七年頃の演說又は論文にして一度其當時の東洋學藝雜誌に載せられたるものなるを博士に請ふて再たび此處に掲載せるものなり。漢字に惑溺せる者は之を讀みて以て漢字の害に氣づくべく、文字改良論者は之を讀みて以て漢字征討の兵略を悟るべく、文章家は之を讀みて以て議論文上の修辭法を發明するを得ん。）

外山正一君

●漢字を廢すべし

（假名の會の惣寄合に於ての演說）

會長、御婦人方、殿原、いづれもにも御存の通り西洋諸國の人の宗旨は耶蘇教なり。而して今日勢力ある耶蘇教の宗派を大別すれば則ち「ロウマン、カソリツキ」教「プロテスタント」教「グリーキ」教の三宗派なり。此三教の中にて最も勢力の強きものは「ローマン、カソリツキ」教と「プロテスタント」教なり。又此二教の中にて「プロテスタント」教は最も開化したる者最も智識に富む者の信ずる宗旨にして「ロウマン、カソリツキ」教は概して言へば智識に乏き者の信ずる宗旨なり。則ち「プロテスタント」教は英人の宗旨なり、獨乙人の宗旨なり、「スコツトランド」人の宗旨なり、佛人中の智識に富む者の宗旨なり。「ロウマン、カソリツキ」教はアイルランド人の宗旨なり、イスパニヤ人の宗旨なり、佛人中頑固なる者

の宗旨なり。今日何學を論ぜず大學者と稱せらるゝ所の人々は全く耶蘇教を信ぜざる人なるか然らざれば「プロテスタント」教を信ずる者の中に最も多くして、「ローマン、カソリッキ」教を信ずる者の中には至て少なし。去年今日こそ「プロテスタント」教は斯の如く盛大を極はめたれども、今日より四五百年以前には歐羅巴は全く「ロウマン、カソリッキ」教の歐羅巴にてありたるなり。「プロテスタント」教抔と云ふ宗旨を信ずる國とては一國もあらざりしなり。實にや當時羅馬法王の權威は最とすさまじきものにて、如何なる帝王と雖も、一度法王の意に逆ふて爲に破門せらるゝ時は、臣民は申に及ばず妻子眷屬にまで見はなさるゝと云ふ最とおそろしき目にあはせられしが故に、羅馬法王には諸國の帝王も皆二目も三目も置きたる如き情實にてありしなり。特り法王の權威のみ斯くの如く熾なりしにあらず、之に從ふ僧侶達の權勢は亦隨て熾なるものにてありしなり。而して羅馬法王と其配下の僧侶社會に斯の如く熾なる權勢のありたるは

全く當時の人が一般に「ロウマン、カソリッキ」教を奉じたるに因るとなれば「ロウマン、カソリッキ」教に世人の背かざらんとを欲して法王の苦慮なせるも固より怪むに足らず。就ては世人の「ロウマン、カソリッキ」教に背かざらんとを欲して法王の使用したる方便は多くある中に其一は則ち世人に經文を讀ませぬ樣に爲したるとなり、それには又如何なる工風を用ひたるぞと云ふに、世人に讀めぬ樣なる語を以て經文を綴らしめたるなり、則ち經文は「ラテン」語にて之を認めおきたり。されば經文を讀みてはならぬと云ふ譯にはあらざりしも、六かしき「ラテン」語を學びたる者にあらざれば讀みたくても經文を讀むことは出來ず、當時「ラテン」語を學ぶ者は今日より多かりしとは雖も、それでも各國共に其人民中「ラテン」語を解する者は極めて僅なりしが故に耶蘇教を奉ずる者の中にて經文を自ら讀みて僧侶の說く所は經文に載る所と合ふや、僧侶の云ふ所には何程虛言がありや否を自ら判斷することの出來る如き者は最も尠なかりし

なり。斯る有樣なりしは僧侶の爲には如何にも都合よきようにてありしなり。宗教の問屋は羅馬法王一人にて、之を賣捌く僧侶の外には經文を讀得る者は尠なかりしが故に耶蘇の教には全く戻りたることを云聞せられてもアメン、アメンと云ふて難有がりて居らねばならぬ仕儀にぞありつる。御客の眼を塞ぎ置きて品物を賣附けんとする商人がありたらば、それは實にふとき奴なり。羅馬法王は取も直さず斯の如き商人なり。併し馬鹿な奴は難有和尚樣だと其足までをなめる者が澤山あり。世人の眼が開かぬ樣にと法王と其手下の族が心配したるも實に最の至なり。去乍時の勢は致方なきものなり。千五百年代の中頃に至りて經文は竟に各國の語に翻譯せらるゝに至れり。且又此頃てうど印刷の發明がありたるが故に國々の語に譯されたる經文は忽地に耶蘇宗徒の中にひろがりたり。こゝに於て耶蘇宗徒は僧侶が是まで何程うそを云て居りたるかを名々に判斷するとの出來るようとはなりたり。各〻方にも御承知かは知らねども羅馬法王は至

て深切なる人にて昔より帳面を扣へて居りて、天下の書物の中にて讀みては門徒の爲に惡き者と認むる者は一々其帳面に載せ門徒に之を讀むことを禁する定なり。併し餘り深切すぎて昔より學術をすゝめ世の開化を助くる如き書物は此帳面に書載せられぬは稀なり。斯の如き書物は門徒は讀むとは出來ぬ樣になりて居るなり。蓋し此張面の初て、出來たるは千五百五十九年にポール第四世と云ふ法王が各國の語に翻譯して出版せられたる經文を禁じたる時なりと云へり。其時法王は其禁じたる經文を手をつくして取あげ一々之を燒すてたり。去乍人情は何地も同じとなれば、開けては惡いと云はれたる玉手箱は開けて見たく、のぞいて惡いと云はれたる節穴はのぞかずには居られぬ如き者が多き故に、羅馬法王が經文を取あげ樣としても其手を食はぬ者が中々澤山ありて、其人達が自身に經文を讀みて見ると、僧侶から聞居ることと違ふこともあれば、僧侶より絶て聞きたることもなきことまでが、載つて居るとなれば誰も彼も相競ふて經文を讀

む樣になりて、法王は大に信用を失ひたり。是に於て羅馬法王のみを耶蘇教の問屋と爲し置くことに不承知を云ひ出したる者が多くあり、終に歐羅巴大半は「プロテスタント」となりて法王に背きたり。是に由て之れを觀るに各國の言語に經文の翻譯せられたるは法王並に其手下の僧侶の爲には此上もなく不都合のことにてありしなり。されども「ラテン」語を讀むことを知らぬ耶蘇宗徒に取りては如何。自分達にも分る言語を以て綴られたる經文の出來たるは不便なるとなるか、決して不便なることにてはあらざるなり。併し英人の爲には最も大事なる經文を英人に分らぬ言語にて綴りて置き佛人の爲に最も大切なる經文を佛人に分らぬ言語にて綴りて置くのが宜いと云はん如き者は特り羅馬法王と其子分の僧侶達のみにあらず。斯の如き者は今日、我邦にも澤山あり。日本の書物を假名にて綴らんとを不便なり、不都合なりと云ふ人達は則ち斯の如き者なり。日本人に讀易い假名にて日本人の讀むべき書物を綴らんとを不便だと云ふ人は

英人の讀むべき書物を英人に讀易い英語を以て綴らんと云ふを不便だと云ふ人と其馬鹿加減は同じ者なり。併し今日我邦の書物を假名にて綴らんとを不便だと云ふ人達は決して馬鹿者にはあらざるなり。其人達は中々譯の分つた人々なり。尠なくとも彼の羅馬法王と其子分の僧侶位は譯の分つた人々なり。羅馬法王と其手下の僧侶達は何故に諸國の人に分る言語に經文の翻譯せられんとを拒みたるぞ。全く自家の爲に不都合なると多き故にてありたるなり。我邦の漢字を廢さんと云ふとに不同意なる人々は何故に不同意なるや。全く自家の爲に不都合のみの多きが故に外ならざるなり。

我邦人中に漢字を廢しては不便なり、不都合なりと云ふ者多くあれども、其不便不都合とは誰の不便不都合ぞと尋ぬるに其不便、不都合とは全く自分達の不便、不都合のみなり。假名の會の諸君と雖も特に自分達の不便、不都合をのみ圖られんには、漢字を廢さんは不便なり、不都合なりと云はれん如き者も定め

し多くあるとならん。併諸君の云はるゝ如き便たり、都合たり決して數年の星霜を費して漢字を學び得て之を自由自在に讀書するとの出來る者の便利、都合の謂にあらざるなり。今日漢字を知らざる數百萬人の便利都合の謂なり。今より以後我邦に生れ出づる千億萬人の便利、都合の謂なり。國の開化の爲の便利、都合の謂なり。西洋諸國と競爭せん爲の便利都合の謂なり。今日漢字の教育のみある人々に取りては漢字を廢さんことは固より不便ならん。それは此方にても百も承知なり。今日我國には漢字を讀習するを知る計の故を以て好き地位を占めて居る者澤山あり。新聞記者でも役人でも民權家でも其の中で威張て居る人達は抑も如何なる教育を受けられたる人なるか。如何なるとを知らるゝ者なるや、教育とては漢字の教育より外には藥にしたくも外の教育は受けられたるとなく、知て居らるゝとは、かくの多き字をよみかきするとに達者なるのみにて冗長の文を綴り、あたら白紙を惜氣もなくほごにするとを知て居らるゝより外

に知て居らるゝとはなき人々が多し。毛唐人にも分らぬ程六かしき詩文を作るとは知れども物理學や化學や地質學や植物學や動物學や生理學に至りては中學生徒は云ふも更なり、小學生徒にもはるか及ばざる如き者が多し。何樣斯の如き人々に取りては漢字を廢さんは一方ならぬ不便のとにてあるならん。樣が上るならん。顯がひるならん。上等社會の人に漢字を廢するは不便なりと云ふ人の多きは固より怪むに足らざるなり。去りとて此人々とて決して故意に天下の爲も顧ず私利を營まんとせらるゝ如き惡人にもあらざるならん。羅馬法王並に其手下の僧侶とても故意に私利を圖りし者は決して多くはあらざるならん。凡そ誰にても自分の爲に惡き事は他人の爲にも惡き事ならんと思ふは一般の人情なり。羅馬法王は我より外には耶蘇教の眞意を解する者はなきとと思へり。故に自分の手下の僧侶に就て教を受くるにあらずんば神の道を知らんとは出來ざるとと思へり。世人がみだりに經文を讀むは却て邪道におちいるの基なりと思へ

り、故に世人の廣く讀得べき言語に經文の譯されんとは甚だ憂ふべきことと思へり。今日我邦の漢字を廢するは不便なりと云ふ者の如きも、之を廢するは已の爲に不便なること多きが故に他人の爲にも亦不便多きことと思へり。

或る人の爲には如何程不便を生ずるとも天下の爲に便利ならんとは行はずんばあるべからざるなり。今日の人の爲には如何程不都合多きことと雖も之を行ふ時は百萬年の後までも都合よきことと認められたることは勉めて爲さずんはあるべからず。假名嫌の者の所謂る不便の如き不便を生ずることにして維新以來行はれたること夥多あり。驛遞局の設立せられて郵便の法の整頓したるは天下萬民の爲には此上なき便利のことなれども、私利を專にする舊來の或る飛脚屋は實に不都合極はまることと思へるならん。是は政府の專賣なり、民の自由を害する仕方なり。天下の一大事なり、斯ることは自由國には有間敷きことなりと思へる者も定めしあることならん。併し驛遞局は立ねばならず、郵便の法は整頓せずんばあらず。

鐵道の出來て濕車の走るは舊來の宿々の者の爲には此上なき不都合のことなり。宿々の者は活路を失ひ、宿は全く衰微せん。宿々の人は宿々が衰へれば天下も隨て衰へることと思へるならん。世は實に末なりと思へるならん。併し鐵道は出來ねばならぬなり。封建の廢せられ世祿を取上れたるは士族の爲には此上なき不便なり。併し喰つぶしのへりたるは天下の爲には甚だ都合よきことなり。大小を取上られて、切ずて御免抔云ふことのなくなりたるは士族の爲には至て不便かは知らねども、にんじん牛房同樣に切ずてにされる樣の人達に取りては斯ることのお廢止になりたるは何より結構のことなり。士族の爲には大小がさせて、切取强盜武士の習抔云ふ主義の行はれたらんには、それこそ何より便利なることにてあるならん。斯る主義の行はれたらんには勿躰なくも大職冠鎌足の子孫だの、清和天皇の後胤だのと云ふ人の人力車夫に落ぶれて家柄にも耻ず、一錢の蠟燭代をお客にねだる抔と云ふことは爲さずとも濟むことならん。併し切取られる身分の者

の爲には、士族は如何に落ぶれ樣とも切取られぬが萬々都合よし。

余を以て見るに、漢字を廢しては不便なりと云ふ者多くあれども、其論を聞くに其謂る不便とは漢字を讀みかきするには既に達者なれども、假名を讀みかきするにはまだ不熟練なる者の覺ゆる不便にして、其他の不便は甚だ尠なし。假名の會の仲間には大槻文彥君の如く、自ら假名狂氣と稱せらるゝ、假名の會の高山彥九郎氣取にて居らるゝ先生のあられて、假名のみを用ひては不便なりと云ふ說は既に之を十分に打平げられたれば、某の如く、それ程の狂氣にもあらぬ者が今更喋々するにも及ばざるとなれども、敵は大勢、身方は小勢のとなれば、俄に勝を得んと中々六かしく、攻擊の出來る丈、敵を攻擊せねばならぬなり。故に御迷惑は百も承知なれども、諸君も假名狂氣の仲間のとなり。何も假名の爲なれば、御迷惑でも反對論の大略と某の駁論の大略とを一通御聞下されんとを願ふなり。

（第一）假名ばかりを用ひんと云ふ說を非とする者の賴みて以て根據となし、假名者流を攻擊するに最も好き點なりと思ふものは、同音にて意義の違ふ語は漢字を用ひれば一々其區別は立つものなれども、漢字を廢して假名のみを用ひん時は何が何んだか全く混雜してしまふならんと云ふこと是なり。殊に漢語には同音にして意義を異にするもの多くあるが故に、漢語まじりの文章を假名のみを以て綴らん時は全く何だか分からぬ、べろ〳〵になるならんとは是れ反對論者が最も堅固なる城の如くに思ふ所の論なり。然れども余を以て見るに此論たる一を知て二を知らざる者の論なり。其故は（第一）同音異義の語を假名にて綴りて、區別が立たざる譯ならば、同一の字にて種々の意義ある漢字を以て綴りても、區別の立たざるとは同樣にてあるべき筈なり。今漢字をみるに同一の字にて種々の意義あるもの實に多し。例へば「强」の字の如きは「ツヨシ」「スコヤカ」「ツトム」「シイテ」等の意義あり「露」の字の如きは「ツユ」「アラハル」等の

意義あり、「剪」の字の如きは「ツイタチ」「ハジメ」「キタ」等の意義あり。「行」の字の如きは「クダリ」「ツラナル」「ヲコナヒ」「ユク」等の意義あり。「經」の字の如きは「フル」「ツヲ」「タテ」「ノリ」「クビル、」「タヾチ」「タテスヂ」「ヲサム」「イトナム」「ハカル」等の意義あり。其他枚擧にいとまあらず。英語の如きも同音の語にして種々の意義あるもの甚はだ多し、例へは同しく「フライ」と云ふ語にして「飛ぶ」「ハレツスル」「ニゲワシル」「アゲル、紙鳶抔を」「乘る車の一種」「輪の一種」「旗の一部」「蠅」「磁石の一部」「印刷機の一種」等の意義あり。同じく「フート」と云ふ語にして「足」「寸尺の名」「歩兵」「詩の行の一部分」「オドル」「アユム」「基礎」「足ニテトル」「フム」「クル」等の意義あり。同じく「ハング」と云ふ語にして「ツルス」「クビクヽル」「カンガヘル」「ナガビク」「ヨリスガル」等の意義あり。其他同音同綴の語にして夥多の意義あるもの枚擧にいとまあらず。實に英語には唯々一の意義のみの語は甚だ尠なし、斯く英語には同音にして、夥多の意義ある

る語の多きが故に假名嫌の人の考に從へば英人も竟には羅馬字を廢して漢字と出掛くべき譯なり。併し今日までは英人が斯の如き氣ちがひになりたるとは、余に於て聞かざる所なり。好しや英人が羅馬字を廢して、漢字を用ふるとあるも、實は少しも益はあらざるならん。何んとなれば既に前に陳べたる如く漢字にも同字にて種々の意義あるもの夥多あるが故に、英人が羅馬字を廢して漢字を用ふると雖も、つまり五十歩百歩どころではなく、五十歩五十歩で、彼にて區別の立たざる論ならば此でも區別は立たざる筈なり。（第二）　日本語には同音にて意義の異なるもの多きが故に、假名のみを用ひては區別が立たなくなると云ふなら、日本人の談話が互に分るは如何なる譯なるぞ、假名では分らぬと云ふ人達は、日本人の談話は分らぬから皆啞者になりて、漢字を以て筆談と出掛くべき筈なり。支那の談話は日本の談話よりも尚ほ分らざる筈なり。支那人は決して口をきくべからざる者なり。漢字と云ふ最も結構なるものがあること

なれば支那人の爲には何もかも皆筆談でやるのが至極便利であるならんに、日本人も支那人も啞者と出掛て筆談と爲さゞるは何かそこには不便なることがあるとと思はるゝなり。論者は同綴の語でも話ならば分れども假名で書ては分らぬなり、何となれば同綴の語でも意義を異にするものは話ならば音節若は調子に異同ありて、一々すぐ區別は立てども、假名書では斯の如き區別は全くなくなるが故に實に混亂を極はむるならんと云んが、余を以て見るに、話にても全く同音のものにして意義の異なる言語決して尠なからざるなり。彼の「橋」と「箸」の如きは東京抔に於ては全く區別なきにあらねども、「橋」と「端」に至りては少しも區別なきが如し。又「蜂」と「八」と「鉢」とは共に「ハチ」なり。口にて「ハチ」とのみ云はんには「蜂」のとだか「八」のとだか「鉢」のとだか少しも分らねども、それでも話が分るなり。英語の如きも亦然り。特に綴の同しきのみならず、音節より、調子に至るまで全く異同なきもの其數尠なからず。前に云ひたる「ノート」の如き種々の意義はあれども、其音勢に至りては少しも異同あるなし。又「マーチ」の如き「三月」と云ふ義の時も「進ム」と云ふ義の時も其音勢は全く同一なり。又「メイ」と云ふ語の如き「五月」と云ふ義の時も助動詞の時も全く同音なり。其他斯の如きもの枚舉するに遑あらず。然れども話の中に斯の如き語を用ふるとは多くあれども、間違の出來ることは至て尠なし。其話でよく區別の立つは全く前後の關係の爲なり。而して前後の關係に由て區別の立つ理は話でも假名書でも少しも異同あらざるなり。蓋し漢字と雖も前後の關係によるにあらずんば區別の立たざるもの夥多あり。唯一字「行」の字を書きて「ユク」と云ふとだか「オコナヒ」と云ふとだか當てゝ見ろと云はれたら、如何に假名嫌の者と雖も定めし困るならん。「省」の字を一字書きたばかりでは「ツカサ」と云ふとだか「カヘリミル」と云ふとだか決して分らぬならん。假名者流がたは「タコ」「タコ」「タコ」と書きたらんには成程如何なる「タコ」のとだか少しも分らぬと雖も文章の

中にあらんには假令假名文にもせよ前後の關係に由て「タコ」と「タコ」と「タコ」とて一々區別の立つものなり、即ち「かぜが、よいから、こどもが、「タコ」をあげてゐる」「こんにちは、さかなやに「タコ」がたくさんあるから、ばんのそうざいは、いも「ダコ」にでもするがよい」「こんにちは、ちぎやうに、つき、しごとしが、「タコ」をもつてまゐりました」と假名で書てあつても決て間違は出來ざるならん。如何に假名嫌の先生と雖も、子供があげる「タコ」と魚屋に賣て居る「タコ」と仕事師か地形する爲に用ふる「タコ」と混同する恐はあらざるならん。

（第二）假名にては漢字の如くすら〳〵と書くとは出來ざるなりと假名嫌の者は云へり。然れども其人達が漢字はすら〳〵と書けても假名はすら〳〵と書けぬは決して、一は漢字にして一は假名なる故にはあらざるならん。全く漢字は幼少なる時より、常に書なれたるものなれども、假名に至りては、それ程書きなれざる故ならん。漢字と雖も最初より其人達にすら〳〵と書けたるものにも

あらざるならん。隨分一畫一點毎に考へ〳〵書きたる時もありたるならん。今でも中々すら〳〵と書けぬ漢字も少しはあるならん。漢字を多く知らざるが故に常に假名のみにて書きなれたる者には假名のみにて中々すら〳〵と書くとの出來る者あり。婦人方の中には假名をすら〳〵と書く者も隨分いくらもある樣に思はるゝなり。洋學者は皆覺のあるとなるが、横文字を初て書き習ひたる時には横文字は中々すら〳〵書けぬものにてありき。初は横文字と云ふものは決てすら〳〵と書けぬものならんと思へる計なりき。假名にてはすら〳〵と書けぬと云ふ人の如き、そこで横文字は決してすら〳〵とは書けぬものならんと云ふて横文字は止めにせんとする如き者ならん。笑止の至とこそ云ふべけれ。假名は纔に四十八字なり。漢字は數萬あり。如何程假名嫌の者と雖も、漢字を書習ふ程假名を書習ひたらんには、いくらでもすら〳〵と書ける樣になるならん。

（第三）假名而已の文章は漢字まじりのものゝ如くにすら〳〵と讀めぬと云ふ

者あり。是も前條同樣に熟練するものなり。漢文はすら〳〵と讀むとの出來るものにして假名文はすら〳〵とは讀めぬものなりと云ふ如き理はあらざるならん。讀みつけたらんには假名文と雖も必ずすら〳〵と讀むとの出來るものならん。漢文と雖も決して最初よりすら〳〵とは讀めぬものなり。假名嫌の人と雖も漢文は云ふも更なり、漢字まじりの文章と雖もすら〳〵と讀むとの出來る者なりと保證しがたき者も隨分あるならん。假名嫌の者の中にも漢字まじりの文章をうん〳〵とうなり乍ら讀む如き者も尠なしとせざるなり。假名文と雖もなれさえすれば決て拾ひ讀にせずともすむものなり。其證據には「めし屋」「そばや」「どぜうや」等の看版抔を拾ひ讀にする者は多くはあらざるならん。假名嫌の者と雖も空腹なる時に此等の看版を見たらんには決して拾ひ讀にはなさゝるならん。蓋し讀なれさえしたらんには假名而已を以て綴りたる文章は皆此等の看版同樣に一目瞭然に讀み得べきものとなるならん。其證據には洋學者は皆覺のあ

るとならんが、最初洋書を讀み習ひたる頃には一語一語に拾ひ讀になしたる而已なず、一綴一綴に拾ひ讀になさねばならざりしなり。然れども次第に上達するに隨ひて一綴〳〵に拾ひ讀にするに及ばざる樣になる而已ならず、一語〳〵に拾ひ讀にするに及ばざる樣になるなり。特り一語〳〵に拾ひ讀にするとの出來ばざる而已ならず、中々長文句と雖も一目して、すぐ其意を解し得るとの出來る樣に成る者なり。併し是は大に習ひ樣によるものなり。最初より常に變則讀にしつけたる者は、文意を解するとは中々よく出來る者と雖も、兎角ぼつ〳〵と返り乍拾ひ讀にする僻のあるものなり。是に反して正則讀にしつけたる者は精きとは前の變則先生に及ばざるも、大意を取〳〵り讀むとは變則先生よりは餘程達者にして變則先生がぼつ〳〵一枚讀む間にはすら〳〵と二枚も三枚も讀み得るならん。漢學と雖も亦同樣にてあるならん。堂々たる漢學先生の中にて洋學者が横文を讀む樣にすら〳〵と漢文を讀み得る者將た幾人ありや。假名文

を讀みつけざる者に假名文がすら〳〵と讀めぬからと云ふて假名文は決てすら〳〵とは讀めぬものなりと云はんか如きは實に奇妙なる論法とこそ云ふべけれ。

（第四）甚だしきに至りては漢字を廢し假名のみを以て文章を綴ることにしても、たれにでも名文が書けると云ふ譯には行かざるなり、矢張習はずには名文は書けざるならん、されば、假名のみを用ふることにしても格別益あらぬならんと云ふ如き者往々あり。實に言語に絶えたる論とこそ云ふべけれ。論者は習はねば出來ねば出來ぬとならば如何程六ケしくても同じことと思へるか。游は習はねば出來ぬものなり、故に論者は游は石をしよつて稽古すべきものなりと云はんとするか。

（第五）假名にては文章が長くなり、紙のいることが非常に多くなるならん、漢字なれば一行に書き終り得べきものも假名にて之を綴らんには、二行にも三行

にもなるならん、何んとなれば漢字なれば一字にて事足るべき所も假名にては二字も三字も用ひねばならぬもの多ければなりと云ふ者あり。一理なきにあらず。去乍是又よく考へざる者の論なり。なる程、「林」と書く代に「はやし」と書き「男」と書く代に「をとこ」と書き「蛇」と書く代に「へび」と書かんには固より長くなることは長くなれども長くなりても決て仔細はあらぬなり。何んとなれば長くなりたる代にはゞか挾くなりたればなり。「林」「男」「蛇」の代に「はやし」「をとこ」「へび」等と書かんにはたてに紙のいることは增したるにもせよ横に紙のいることはへりたるなり。又假名は漢字よりは餘程細くてもよきものなり。漢字より餘程細くても讀むに不都合なし。又餘程細く書けるものなり。されば漢字の代に假名を用ひたればとて、字の大きさと形次第にて、強漢字雜りの文よりは、假名而已のものが長くなると云ふ譯にもあらぬなり。

（第六）假名而已にて書くは漢字雜りにて書くより筆數を多く動かさゞるを得

ざるなりと云ふ者あり。此論たる會員大槻氏の既に十分駁せられたるものなれば、今更此論に就て喋々するを要さゞるなり、特にこゝに一言すべきは漢字を書習ふ程「いろは」四十八字を書習ひたらんには假名の方が却て漢字よりも書きやすきに相違なからんとは既に前に陳べたる如くなるが、文字の性質より考へても假名は漢字程力を費さずして書き得べきものなり。凡そ何の運動に限らず、單一なる運動は錯雜なる運動よりは爲し易きものなり。同し分量の運動でも錯雜なる運動は單一なる運動よりは骨の折れるものなり。同じ里程の路でも直くなるものを走り行くのは曲りくねりたる路を走り行くのよりは、はるかにらくならん、針目の數は同しとでも眞直にぬうのと右へ左へ上へ下へと、まがりくねりてぬふのとは眞直にぬふ方が甚だらくならん。蓋し假名を數字書くのと漢字を一字書くのと同じ分量の運動にても假名を書く方がはるかにらくにてあるならん。假名を書く爲に要する運動は重に上下の運動にて且つ甚だ單一なるものなれども漢字を書く爲に要する運動は上へ下へ右へ左へ殊の外錯雜なるものなり同じ筆數にても漢字を書く方が假名を書くよりは餘程骨の折れるものなり。

（第七）又或る論者は何事も自然の勢にあらずんば出來べからざるなり、社會の事の興起變遷するは則ち社會の大勢の然らしむる所にして、其中個々人の得て枉ぐる能はざる所なり、漢字まじりの文章は太古より行はれ來れる者なり、今假名の會の者抔が兎や角と云ても漢字は決して廢する能はざる者なりと、天下の大勢や自然の理をまる呑になしたる如くに云ひ立つるなり。併し何が自然の理にかなへるか何が天下の大勢の向ふ所なるかは容易には分らぬなり。維新前に今日の如く容易に封建の制度の廢せられん者なりと思へる者は將た幾人ありしや。明治の初に森有禮君抔が廢刀論を主張せられたる時に當りてや、天下大概は昔より武士の魂と云ふ程のものを俄に廢さんとは決して自然の理に合ふ

とにあらず、數百年の國風を一時に變へんとは決て出來べからざるなり、日本魂國の武士の大小を取上げん抔云ふとは特り天下の大勢のよくなし得べき所なり、個々人の力にては決て出來べきものにあらず抔と云へるならん。併し封建も廢せられたり。廢刀も出來たり。今では封建を廢するは自然の事なり。廢刀の行はれたるは天下の大勢の向ふ所なりし故なりと云はぬ者は一人もあらぬならん。されば|めつたに|これは自然の理に合へり、彼は天下の大勢に背けり抔とは云はぬものなり。めつたに智慧者ぶつて天下の大勢は個々人の得て枉ぐる所にあらず抔とは云はぬ者なり。個々人が大勢の一部分をなす者にあらずとは誰が云ひたるぞ。社會は個々人より成立する者にあらずや。社會の事にして個々人の關係せぬ事は至て尠なし。水戸烈公の如き。高山彦九郎の如き西鄕隆盛の如き個々人が勤王主義を唱へ王政復古を主張せられたればこそ王政復古も出來たり、封建も廢せらるゝに至りたり。天下の大勢は個々人の得て枉ぐる所にあらずと云て此等諸士が勤王主義を唱へらるゝとのなかりしならば王政復古も封建廢止も何時に至て出來んとだか知るべからず。徒に大勢の至るを待ち、口を開きて牡丹餅の入るを待つが如くには參らぬなり。畢竟頼山陽の如き、高山彦九郎の如き、個々人が勤王主義を唱へるとか、封建制度を廢さんとか云ふ時は斯る念慮は決て之を公に主唱する人々に限りて起るものにあらず、當時の人には之を公言するとは知らざるも同じ念慮の胸裏に起る者は夥多あるならん。凡そ世に久しく行はれたる事を此人や彼人が廢すべしとか除くべしとか云ひ出すは年來の經驗によつて略々其事の利害が人に分る樣になりたるか、若くは往時には社會の爲に必要なりしも今は最早社會の爲に必要にあらぬとの人に分る樣になりたるが故なるべし。然れども公然理由を陳述して之を廢すべし、之を除くべしと云はん如き者は初は至て稀なるべし。多數は唯々胸中に之を廢したし、之を除きたしと思ひ居る者ならん。蓋し多數は何事に就ても自己の考を公に陳

述するとの出來ざる者ならん。されば世に弊害多き事の行はるゝ時は多數は唯鬱々として世に不滿をいだくに過ぎざるならん。若し此時に當て何人に限らず其事に就て明なる思想を懷ける者ありて世人に先立ちて其弊害を說き之を廢し之を除かんとを主唱する者あらんには多數は初て我が不平の源因が明に分り、主唱者は則ち多數か云ひたくも云ふとを知らざりし事を明に云ふ者なれば其說は忽地天下の輿論となりて除くべきとは除かれ、廢すべきとは廢さるゝに至るなり。マーテン、ルーサーが一度羅馬舊敎を攻擊して忽地新敎の起るに至り、烈公山陽等の如き者が勤王主義を主唱して竟に王政復古を來すに至りたるは共に同一の手續なり。最初は彼の人此人が彼れこれと云ひ出したるに始まれり。ルーサーにしろ誰にしろ他人の心に少しも起らざる考を自分一人考へ出したと云ふ者はあらざるならん。全く世の變遷進化に由て漸次に世人の心に起り來れる思想を他人に先立て發言なしたるに過ぎざるならん。蓋し社會の事は何に限ら

ず一人發言し二人が贊成なし次第〳〵と同意が增へて竟に天下の輿論となりて行はるゝに至る者なり。最初一人二人と主唱する者がなき時は竟に主唱する者はあらざるならん。今日假名の會の諸君の如く漢字を廢さんとを主唱する者の出來たるは全く自然の勢の然らしむる所なり。今日漢字を廢さんと云ふ者の既に斯の如く多きは我邦人民が是までの經驗に由て漢字の不便を知り之を廢さずんばあるべからざるとを悟れるに由るなり。然而して假名の會の諸君の如きは此事に就て既に明なる思想を懷かるゝ者なれども世には斯く明なる思想はなけれども私に漢字の不便を憂ひ之を廢さんとを欲する者幾百萬あると知るべからず。漢字を廢さんとを公然主唱する者にして既に斯の如く多人數なり。公然主唱するとは知らざれども余輩に全意なる者の多きとは固より知るべきなり。我輩の主唱する所は則ち天下の大勢の向ふ所なると疑なきなり。是れ決て虛言にあらざるなり。余輩を贊成なさん者の日一日に多からんとは鏡にかけて見る如く

なり。何んとなれば漢字を用ひるとの不便は日一日に增加するものなればなり。何故漢字を用ひるとの不便は日一日に增加すべきや日一日に人の知らねばならぬとが多くなればなり。往昔西洋諸國と交通の開けざりし時の如くに學問と云へば書の多き字を讀み書きするより外にはなかりし時代に在りては漢字を學ばん爲に數年の星霜を費すもさまで害なきとなりしと雖も今日は漢字の外に學ぶべきとが澤山あり、畫の多き字をならべて詩文を作るとさへ知て居れば自身一人は大學者の氣取りで居りても、世人は最早斯の如き輩は學者とは認めぬ如き時勢となりたり。今日は畫の多き字の外に衞生學あり、數學あり、物理學あり、天文學あり、動物學あり、植物學あり、心理學あり、論理學あり、漢字は知らざるも可なりこれ等の學問は學ばずんばあるべからず。昔日に在りては漢字を學ぶは特に之を學ばん爲に學ぶものゝ如くに思ひたる者も多くありたれども、今日に在ては漢字は思想を交換し學問を傳ふる爲の方便に過ぎざるとを知る者

319413

多し。若し其方便にして、之を學ばんには多數の歲月を費さずんばあるべからざる如き性質のものにして、之を學ぶが爲に彼の眞の學問を學ぶ爲の時を大に減少する如きものならんには此方便は一日も早く改良せずんばあるべからず、此方便たる漢字の如く六かしきものにして之を學ぶが爲に光陰を費さんには到底西洋人と競爭すると能はざるならん。例へば西洋人は靴を穿ちて走るに、日本人は足駄を穿ちて走るが如し。今の時にとりては宜しく奮發して跣足にて走らざるべからず、將來尙ほ漢字を用ひんとを主張する者は足駄を穿ちて走るの人か。偖此に人々の注意を要することあり。漢字を廢すると云ふとと假名を用ふると云ふとは問題の相異ると是なり。漢字を廢さんとを主張する人の中には或は之を廢した上は羅馬字にするがよいと云ふ者あり。或は朝鮮文字は假名にも羅馬字にも優るものなり、宜しく朝鮮文字にするがよからんと云ふ者もあらん。或は日本は佛敎國なり、梵字にするにしかずと云はん如き者もあるならん。或は

大うかれにうかれ出し國語を全く改め英語を用ひるがよからん抔と云ふ者もあらん。本會諸君の如くずつと着實に出掛け、我邦は言魂の國なれば漢字を廢する上は我邦の文章は全く假名にて認むべしと云はん如き者もあるならん。蓋し今日假名組の斯く多きを以て見れば兎に角一時は假名組が勝利を得んとする如く見ゆるなり。そこで既に諸君の如く我邦の文章は假名を以て綴るべしと決定せられたる以上は更に熟考すべき問題數個あり、則ち左の如し。

（第一）假名を用ひるならば如何なる假名が讀みよきか。如何なる假名が書きよきか。今日までは諸君は出版にも筆にて書くにも平假名を用ひられんとせらるゝが如し。併し書くには平假名がよけれど出版には片假名がよいとか、又は書くには片假名がよけれども、出版には平假名がよいとか云ふともなしとせず。是はよく試驗して見ねばならぬことなり。

（第二）活字の形は如何なるが最も讀みよきか。たけのつまりたるものがよくはあらぬか。字の間は成る丈接近したる方がよくはあらぬか、横文字でも字と字の間の餘りあきたるは讀みにくきものなり。本會の如きは先づ活字の見本を幾樣も作りて篤と研究すべきなり。

（第三）通常の書物には如何程の大さの文字を用ふべきか、文字は如何程の限りまで小く爲すも眼に害なきか、洋字に比せは大小の權衡は如何あるべきか等を考究せざるべからず。

（第四）本日諸君の如く此場に參集せられたるを見れば實に本會の盛大なるを認知するに足れども、會員諸君と漢字を主張する輩とを比せば余輩の徒は實に僅々たるものなり。假令彼に論據なしとするも此僅々たる人員を以て量り知れざる多數の反對論者と戰ふは最も難事たり。此時に當て若し會員中に內破を爲すと云ふとのあらんには戰爭は爲し能はざるぞ。實に容易のことにて反對論者に打勝つこと能はざるぞ。宜く、共同一致して力を盡して以て反對論者を攻擊

せざるべからず。余の考にては月の部だの、雲の部だのが是迄の樣なる雜誌を出版して、わづかに會員中に分たんよりは假名の會より天下に向て新聞紙若くは雜誌を發行する方が優れりと思はるゝなり。又公衆を集めて演說をもなさゞるべからず。今日に在ては廣く天下の人に說き勸むる工風が何より肝腎なり。今日の如く月雪花の部門が立ち居りて此部門の一に屬するに非らずんば假名の會員たることの出來ざると云ふは實になげくべきことなり。斯の如き部門のあることなきに於ては假名の會員は今日の幾倍なるを知るべからず。世間には漢字を廢し假名而已を用ひんと云ふ主義を贊成して假名の會員たらんことを欲すると雖も、部に屬さゞるを得ざるが故に見合せ居る者甚だ多し。諸君篤と考へて見られよ、漢字を廢して假名書になさんと云ふ丈は同說なれども、他の點に於ては多少異同のあらんは勿論のことなり。其異同たる決て月雪花の異同に止まらざるならん。若し是まで通り部門を立て置かねばならぬ譯ならば雨の部、風

の部、地震、雷、火事、親父の部までを置かずんばあらざるなり。部はなるべくは廢し度きものなり。

さて會員諸君を見渡すに、官權家もあり、民權家もあり、耶蘇敎を奉ずる人もあれば、佛敎の人もあり、又神道者あるが如く種々の人種あり。官權家民權家及び耶蘇敎、佛敎、神敎の徒の如きは常には喰合をも始めかねざる勢あるに其政治、宗敎の主義の異同にもかゝわらず、斯く一致せらるゝを見れば此かな文字のことは最も重んずべき最も大切なることにて民權より大切に、佛敎より重く、又耶蘇敎より大切なるに由るならん。斯く人々が信ずる政治宗敎の主義の異なれるにも關せずして假名文字のことに一致して力を盡さるゝは實に喜ぶべきのことなり。斯る以上は部は宜く解き一心奮勵して相互に反對論者を駁擊するに盡力せずんばあるべからず。諸君以て如何と爲す。

（東洋學藝雜誌　二九、三〇、三一號）

●漢字を廢し英語を熾に興すは今日の急務なり

外山正一君

今日我邦の急務は何なるぞと問はゞ或は條約を改正して治外法權を廢するにありと云ふ者あらん、或は外債を募りて熾に鐵道を敷設するにありと云ふ者あらん、或は佛教を排除して耶蘇教を弘むるにありと云ふ者あらん、或は海陸軍を擴張して軍備を嚴重にするにありと云ふ者あらん、或は漢字を熾に興して儒教主義を弘むるにありと云ふ者あらん、或は外人に雜居を許し內外の男女をして熾に雜婚せしむるにありと云ふ者あらん、或は民權を弘張し租稅を減少するにありと云ふ者あらん、其他人々の見識に依て今日の急務とする所は彼也是なりと千差萬別ならん。蓋し右に擧げたる事共の中には實に今日の急務なるとも固よりあるならん。去りながら余輩の卑見にては今日の急務中の急務共云ふべき者は漢字を廢するとと我邦人をして西洋語を普通に學ばしむるととの二事なり。

漢字の不便なるとは今更云ふまでもなきと也。特に考ふべきは此不便なる文字は我邦に於ては決て廢する能はざる者なるか。斯の如く不便なる文字を用ひ續くるも海外諸邦と能く競爭し得べきかと云ふ二問題也。余輩の考にては第一漢字は決て廢すべからざる者に非ず、第二漢字を用ひ續かんには特り外人と競爭せんとの至難ならん而已ならず竟には邦の存立も覺束なし。何を以て漢字廢す可らざる者に非ずとするぞと云はんに、我邦人の思想を表さんには漢字より外に方便のなからんには漢字を廢さんとは固より出來ざるべけれども、既に便利なる假名あり、又片假名あり、天下には尙便利なる羅馬字の如き者あり。斯く便利なる者のあるからは漢字を廢すべからずとは固より云ひ難し、蓋し漢字より便利なる者はあらずとは是漢字者流の常に口に唱ふる所也。それ或は然らん。然りと雖も此說たる我邦にては漢語は多く用ひざるべからず、漢語は益々增すべき者なりと假定せる者の說なり。然るに余輩は漢語を減少するの必要なると

を見るも之を益々增加せざるべからざるの理由を見る能はざるなり。漢字を用ふればこそ漢語は益々增加すべけれ假名若くは羅馬字を用ひんには、我邦の語は其字を以て表するに都合よき者に次第に變遷して益々之を以て表するとの出來がたき漢語は漸々に跡を絕つに至らんと何より見易きの理なり。我邦に今日迄漢語漢字の行はれたるは固より止を得ざる事情に出でたるとなり、何んとなれば我邦古來の開化は專ら支那より來れる者にして制度文物都て何事を論ぜず大概支那に由來せざるはなく、高尙なる思想は云ふも更なり、日常器具の類に至る迄之を彼に採らざる者は甚だ尠なかりしが故に之を表するの支那語は勢ひ我邦に行はれざるなく、其語を表するの文字は勢我邦人の用ふる所となりたり。且や制度文物道德經濟都て之を支那に採るとなりければ、苟も學者たり物識たらんと欲する者は必ず漢字を讀まざるを得ざりしが爲に國の開くるに隨て漢字を讀み書きする者は次第〳〵に增加せるが故に竟に今日の如き漢字國となりたるなり。それ、我邦の一時斯の如き漢字國となりたるは固より止むを得ざりしとなれども、我邦は永久漢字國にてあるべしとは決て云ひがたし。最初、我邦の開化は支那に採れる者にもせよ、久く時を經て既に我邦の開化は支那の開化と自ら獨立殊別なる者となりたる上にては最初彼の開化を受取る最中の如く漢語漢字の用は甚だしき者にはあらざるなり。況や今日の如く我邦の智識は最早之を支那に仰ぐとは少しもなけれども、歐米諸國の開化は之をひた眞似に眞似て昔時支那より智識をまる取になしたると同樣に歐米諸國の智識をまるどりになさねばならぬ時に當てや、昔時漢語を用ふるとの必要なりし如く、今日は又歐米の語を用ひんとは必要なり。支那の事物は支那の語を以て表するは便利なるが西洋の事物の如きも西洋の語を以て表するはチンプン漢語を以て之を表さんより便利なる者尠なからざるなり。今日西洋諸國をして西洋諸國たらしむる所の彼の諸學術上に用ふる所の語の如きは十に八九は我邦在來の語の中には適當

なる譯語のなき者なり、斯る場合に於ては直に西洋語を用ふるの便利なること勘なからず。然るに今の習として西洋語を直に用ふる時は至て分りよき場合と雖も必ず六かしき漢字を幾字も組合して何だか分かぬ譯語を作るを以て學者の如く思ふ者もあれば愛國者氣取りで居る者あり、實に愚の至りと云ふべし。

漢字を廢さん時は之に替ふるに何を以てせんやと云はんに、今迄の所にては假名にすべしと云ふ者が多くして余の如きも則ち假名の會の一人なれども、萬全の策は假名よりは寧ろ羅馬字を用る事にあるならん。如何んせん羅馬字を用ひんと云ふ說を贊成する者の寡きを。此說を贊成する者の多からんには余は斷然羅馬字にすべしと云はんとする者なり。羅馬字の便利なることは大日本學士會院中に其人ありと知られたる西周先生が十餘年前に既に證明せられたる如し。特にこゝに一言すべきは羅馬字を用ふる時は西洋語の未だ我邦に適當なる譯語のなき者は直に原語を用ふるに便利なると之なり。

漢字を用ひ續かんには西洋諸國と競爭せんとは甚だ六かしくして竟には邦の存立も覺束なしとは如何なる譯ぞと云はんに、我國は開化の度に於てはるかに西洋諸國に後れたる者なれば、彼と競爭せんとは既に至難なるとなるに若し我にして漢字を用ひ居らんには益ゝ彼に後れ益々彼と競爭せんとは出來がたくなるならん。何となれは彼は羅馬字と云ふ最も簡便なる者を用ふるが故に、彼に在ては智識を得るの道は極て容易なりと雖も、我に在ては漢字と云ふ最も六かしき者を學ぶとは何より必要なれば智識を得るの道は漢字の爲に實に壅塞せられたりと云ふべし。されば我が漢字を學ひ居る間に彼は衞生學を學び得るなり。我が漢字を學び居る間に彼は理學を學ひ得るなり。我漢字を學び居る間に彼は政治學を學ひ得るなり。我が漢字を學ひ居る間に彼は農學を學ひ居るなり。我か漢字を學ひ居る間に彼は工學を學ひ得るなり。斯の如き有樣なれば既に著しく彼に後れたる我は彼に追ひつかん所ではなく、却て益々彼に後れざるを得ざ

るなり。畢竟我邦人が漢字を學ばん爲に多數の年月を費すことを憂へざるは、我邦の開化は如何程西洋の開化に後れて居るか、西洋人と競爭せんとは如何に至難なるかを少も辨知せざるが爲ならん。之をよく辨知したらんには漢字は一刻も速に廢すべきことを悟らんと疑なし。

次に西洋語を熾に興さんとは漢字を廢すると同樣に今日の急務なり。今日の如く制度文物百般の事物都て之を西洋に採る際に於ては西洋語に通ぜんとは我邦人に取りて何より必要なり。殊に我邦人をして西洋の事情に通ぜしめんとは今日の急務なり。今日の如く西洋の事情にうとき者の我邦人中に多きは決て悅ふべきことにあらざる也。西洋の事情にうとき者は西洋人の恐るべき者なることを知らざる者なり。西洋人の交るべき者たることを知らざる者なり。國權の振はざることを慨かざる者なり。國產の興らざるを憂へざる者なり。かる〳〵しく西洋人を侮りて却て恥辱を取らんとする如き者なり。彼を籠せ絡んとして却て失敗を取

らんとする如き者なり。且夫れ今や鐵道は將に全國に敷設せられんとす、而て鐵道の至る所は則ち西洋人の至る所なり。良しや內地雜居を許さるゝことなきも彼の事情にうとき者は勢彼の爲に籠絡せられざるを得ざるなり。爲に我邦人の被る損害は決て少々にあらざるならん。其等の點を考へ見るに我邦人をして西洋の事情に通ぜしめんとは實に今日の急務なり。

既に彼の事情に通ぜんとせば、其方法を考案せずんはあらざるなり。蓋し彼の事情に通ぜんには彼の國に渡航し制度文物宗敎風俗等を觀察するに如くはあらざるならん。然れども是れは是れ少數の人に在て能く行ふべくして多數の人には行ふべからざることなり。多數の人に行ふべきは西洋語に通ぜしめて彼の書籍並に新聞紙雜誌等を讀ましむるより外はあらざるなり。是則余輩が我邦人をして普通に西洋語を學ばしむる事の必要なるを說く所以な

り。而て我邦人の西洋語を學ばんことは今日の急務なりとせば、隨て起る所の問題は我邦人の普通に學ぶべき洋語は佛語なるべきか、獨語なるべきか、英語なるべきかと云ふ問題なり。蓋し佛蘭西贔負の者は我邦人の學ぶべき洋語は佛語に限る樣に云ふならん、獨逸主義に深醉したる者は、獨逸語に如く者はなしと云はん、英吉利斯贔負の者は英語にさへ通ぜんには如何なる專門家と雖も他の語は一切之を知らざるも少しも差支なき如く云ふならん。余輩の考へは斯る人々の考とは大に異れるなり。苟も高尙なる學問を研究して學者たり、研究者たらんと欲する者に在りては獨逸語は固より之を學ばざるべからず、特り獨逸語を學ばざるべからざる而已ならず、佛語も英語も亦之を學ばざるべからざるなり。今日一學科を修めんとする者に取りては英佛獨三國の語に通ぜんとは實に必要なり。若し三國の語を學ぶに遑なき者は是非とも二國の語には通ぜざるべからざるなり。然れども一般の智識を增し西洋の事情に通ぜん爲には英

佛獨三國の語の中其一に通ぜんには固より充分なり。而て斯る目的の爲に普通教科中の一として學ばんには無論英語に如く者はあらざるならん。斯く云ふを聞て一概に余を以て英僻なる者となす思ひそ。斯く云ふ、固より確實なる理由のあるが爲なり。第一、英語は佛語若くは獨逸語より遙に學び易き語なり。第二、英語は世界中最も多數人の使用する語にして、殊に英米二國人の語なるが故に英語に通ずる時は歐州一大國の書を讀み、其智識を受け、其事情に通ぜんとの出來ん而已ならす、米國の書を讀み米國の智識を得、米國の事情に通ぜんとの出來ん者なり。第三、英語は東洋にては殊に專用せらるゝ語なるが故に東洋にては如何なる國の人と交接するにも英語を解し得る時は差支なからん。第四、我邦に住居する西洋人中最も多數なるは英人にして外人との交際中最もはげしき者は則ち英人との交際なれば英語に通じ英人の事情に通ぜんとは我邦人に取りて最も要用也。第五、英佛獨三國の人民中最も着實なる者は英人なれば我

邦人をして着實なる思想を起さしめんと欲せば之をして佛書を讀ましむるにあらず、之をして英書を讀ましむるにある也。第六、英米人は佛獨人に比して道德大に優る者也。道德の爲を思へば英米の二書を讀ましむるに如からざるなり。第七、崇神の心の深きは英米人にありとするか、將た佛獨人にありとするか。英米人に崇神の心の深きことは天下の公認する所也。我邦人をして神佛を崇尊する心ろ强からしめんと欲せば佛獨の書は最も忌むべくして英米の書は甚だ好ましき者也。此等數個の理由あるが故に普通教科として我邦人の廣く學ぶべき語は英語に限ると疑なし。以上述ぶる如く余輩の考へにては今日の急務は漢字を廢することと、我邦人をして普通に英語を學ばしむることの二なり。而て漢字に替ふるに最上の者は無論羅馬字なれども、今日は此說を主張する者甚だ尠きが故に羅馬字の行はれざる限りは假名の會を贊成して、せめては假名にても爲すべきなり。去ながら假名にまれ羅馬字にまれ之を漢字に替へんには漢字雜りの文

章を教授すると同時に假名なれ羅馬字なれ其漢字に替へんとする所の字を以て綴りたる文章を小學生徒に教授して讀み書きせしむることこそ必要なれ。斯なさんには今の童兒の人と成らん頃には漢字を廢さんとも難きにあらざるならん。又我邦人をして普通に英語に通ぜしむるは今日の急務なりとせば普通學科中に之を加へて熾に之を教授せんとこそ願はしけれ。若し教師に乏しとせば各府縣に英語學校を設立し、英米人を雇ひ我邦の英語に熟達せる者と力を協せて英語教師を仕立てしむべきなり。此事たる固より多金額を要するとなれども、事の重大なるを思へば他の費用をはぶきても是非とも此事を行はざるべからざるなり。我邦の今日の有樣に滿足し、高枕にて安眠せんとする如き者は漢字を廢さんとも、英語を興さんとも共に今日の急務なりとは思はざるならん。斯る輩は余の論を以て空想に屬する者と爲すならん。余は空想論者の名を固より厭はざるなり余の論の空想に屬さゞるを悟るべき日は必ず至るべければなり。（東洋學

藝雜誌第三十三號）

●羅馬字を主張する者に告ぐ

外山正一君

百事西洋に習ひ直接に間接に歐米諸國と競爭せねばならぬ今日に在ては漢字を廢さんとは何よりの急務なるとは余輩屢々說く如くなり。我同胞三千六百萬人中には余輩と同感なる者蓋し尠なからざるならん。彼の假名の會の諸君の如きは則ち斯の如き者なり。然れども漢字の廢さずんばあるべからざるとを悟られたる者は獨り假名の會の諸君而已に止まらざるならん。漢字に替ふべき字の問題に至りては種々の考こそあれ、漢字の一日も早く廢さずんばあるべからざるとを確信するの點に至りては假名の會の諸君の外にも之に讓らざる者夥多あるとは余に於て疑はざる所なり。斯る輩の中に或は速記法を主張する者もあらん、或は朝鮮字抔を以て何より便利なる者と思はるゝ者もあらん。なれども多數は羅馬字の便利なることを悟り、漢字を廢する上は羅馬字にすべしと云ふ者ならん。

開明の今日たる羅馬字の便利なることを悟りたる者は固より尠なからざるならん然るに羅馬字者流が假名の會の諸君の如くに團結して漢字の不便なることを鳴し羅馬字の便利なることを唱へて之を主張することを爲さず、又一個人の資格を以ても之を爲す者の尠なきは余に於て遺憾に堪へざる所なり。羅馬字者流か袖手傍觀するは國家の爲に甚だ歎くべきとなり。今の時たる苟も漢字の不便なることを悟りたる者に在りては其假名者流たると羅馬字者流なるとに係はらす、一日も躊躇沈默すべき時にあらざるなり。今の時たる一日も失ふべからざるの時なり。今の童兒は我邦將來の命脉のつながる所なり。今の童兒をして漢字抔を學ばん爲に貴重なる歲月を浪費せしめんには國の安危は甚だ覺束なし。羅馬字者流の如きも假名者流同樣に團結して漢字の廢さずんばあるべからざるとを唱へ、之に替ふるに羅馬字を以てすべきとを主張爲さんとは一日もおこたるべからざるなり。

今の有様を見るに上、政府の役人より下、新聞記者に至るまで漢字の奴隷にあらざる者は尠なし。漢字の勢は實に熾なりと云ふべし。羅馬字を主張する者は此勢力に怖れたるか、將た自然に時の至るを待てと云ふものなるか、果報は寢て待てと云ふ者なるか、開きた口へ牡丹餅の入るを待たんとする者なるか。若し然らざるに於ては奮起して此勢に抗すべきなり。躊躇沈默する者は則ち敵に勢力をかす者なり。漢字の性質たる時の經るに隨て勢力の減少せん者にあらず、之を用ふれば用ふる程其勢力は強くなり之を廢さんとは難くなる者なり。漢字を用ふる間は漢字を以て表するには都合よくして他の字にては表するとの難き性質の語は益々增加するなり一語斯の如き語が增せば一語だけ漢字を廢さんとは難くなり、二語斯くの如き語が增せば二語だけ漢字を廢さんとは難くなるなり。斯の如き語の成る丈尠なき間に漢字は廢すべき者なり。斯の如き語が增せば增す程漢字を廢し難くなるものなり。蓋し今の時たる必ず漢字は廢すべきの

時なり。今の時は決て失ふべからざる時なり。今の時たる、西洋の事物思想のいまだ我邦に其名のなき者の續々入り來る時にして其名を直に採用するにあらざれば新に我に於て其名を作らざるを得ざるなり。而して漢字の行はるゝ限りは漢字を以て表するに都合よき語を作るは是れ自然の勢なり。則ち假名若くは羅馬字にて表するには不便なる語を作るは自然の勢なり。されば此際に於て漢字を廢さんとは最も願はしきとなり。是則ち羅馬字者流に速に奮起せんとを望む所以なり

漢字の如く多勢の奴隷を有する敵に打勝たんとは實に至難なるとなれば既に漢字の不便なるとを悟り一日も早く之を廢さんとを欲する者は其假名者流なると羅馬字者流なるとの別なく團結一致してよく力を合せて其敵を攻擊せずんばあらざるなり。然るに今の風として假名を主張する者は羅馬字を主張する者を以て輕躁なりとして之を笑ひ羅馬字を主張する者は假名を主張する者を以て迂濶

なりとして之を笑はんとする如き有樣なり。尙ほ甚だしきは同じく假名を主張する者の中にても假名抔に關して少々の異同の爲にやゝもすると互に張附を爲さんとする如き者に乏しからず、實に不見識の至とや云はん。胸の狹きとや云はん。片腹痛きことなり。假名にするも羅馬字にするも漢字を廢したる上のことなり、未だ漢字を廢することに定まりもせぬのに假名でなくてはならぬの羅馬字でなくてはいやだのと爭ふ者は兵法を知らざる者と云はざるべかず。大敵を前にひかへ乍ら戰ふことを差置きてまだ取もせぬ分取の割前に就て爭論する如き者は言語に絶えたる者なり。斯る情態にては敵に勝たんとは固より出來ざるなり。是れ則ち余が羅馬字者流に速に團結せられんことを望む所以なり是れ則ち余が假名者流羅馬字者流と同心協力して漢字を攻擊せられんことを望む所以なり。是れ則ち余が假名の會の會員なるに係はらず羅馬字の會を興さんとに一臂の力を盡さんとする所以なり。（東洋學藝雜誌第三十四號。明治十七年七月。）

●羅馬字會を起すの趣意

外山正一君

（十七年十二月二日東京大學理學部に於て開きたる羅馬字會に於て爲したる演說）發起人總代の考では本日此會に於て羅馬字を以て日本語を綴る會を起す趣意を一通演說せねばならぬとて其演說者には某こそ適當の者と衆議にて決しましたので某が一通此の演說を爲すことに定りましたが某の考では本日諸君に向ひて此會を起す趣意を演說するは無要の事と思ひます。何ぜと申すに本日此の席に御來會に成りたる諸君は孰も皆此の會を起すことに御同意にて又之れを起すは必要なりと悟られた方々の事であれば殊更に人に聞かずとも既に本會の趣意を御承知の事と思はれますからで御坐ります。去り乍ら一方に於きては發起人總代と諸君と御互の考が果て同じ事なりけりと云ふ事を見る滿足を諸君に與へねばならず、又一方に於ては廣く天下に對して吾々の趣意を示さねばならず、尤本會を起す趣意だの本會の規則だのは委員を撰みて之を作らしめて堂々と天下に

向ひ之れを公に致す可き積では御座るが、今日諸事の御相談をするに先ちて一通趣意を演說するが適當だと發起人諸士が認められて乃で某が其任に充りました。今某が演說せむとするものは某が獨りで自分の考を吐くではなく發起人總代の考なりと云ふものを演說いたします。特り發起人總代の考なりと思ふ者のみでなく、發起人、來會諸君一同の考なりと推察せらるゝものを申します。

何故羅馬字で國語を綴ることを主張する會を立つるかと問ふに、古來我が邦にて用ひ來りました漢字てふものは甚だ不便なるもので晩かれ早かれ廢さなければならず、之れを廢する日には之れに換ふるものは羅馬字ほど便利なるものはない。さて此の事を信ずる者は西周先生が本尊樣で先生が明治六年に高論を吐露せられてから信者も日一日より多く今日では實に夥しきことになりました。そこで此の人達の考を全國の輿論となして竟に之を押し通さむと思はゞ各々孤立して居らるゝより、いつそ協同一致して事を爲さば望を遂ぐるとも大いに速か

ならむと思はれます。以上申しし事が、即何故本會を起すかと云ふ問に對する尤簡短なる答で御座りますが、之を今少し精しく說きませう。先漢字を廢さねばならぬ理由の最著明なるものを擧げますれば、第一に漢字を用ふる間は之れが讀書を學ぶ爲に貴重なる歲月を多く費さねばならず、其れが爲有益なる事柄を學ぶ時間は非常に減ずる譯なり。第二、漢字の讀書を學ぶ爲に歲月を費すことが多い故、漢字の行はるゝ間は上下の知識が格外に隔絕せねばならぬことに相成る。第三、漢字は「イヂヲグラフ」即思想の記號なるに依て其の行はるゝ間は語を知る計てなく語毎に異りて太甚しく入り組みたる記號をも知らねばならぬ譯なり。然れば始終二重の骨折をせねばならぬ。第四、言語は事物につれるもので昔の樣に何でも支那の眞似をした時には漢字を採り用ひたるは勢止む可からざる事ではあれど今日に至りては支那の事物にて新に採り用ふることは一つもなく、外國より新に採り用ふるものは皆歐米諸國の事では御座りませぬか。

然れば歐米の言語は事物につれて我が邦に入らなければならぬ譯なるに、漢字の行はるゝ間は只其の道を壅塞する許りでなく妙な乙な事があります。諸君御覽なさい。日用の語でも學術上の語でも至て分り易い語があるのに其れに態〻之れを分り悪い漢語に反譯し、分り悪い漢字で之れを表さうとする弊を免れぬでは御坐りませぬか。第五、今日に至りては少しも早く、少しも多く支那の臭氣を脱して、歐米諸國の文化を受けねばならぬ時で御坐る。然るに支那の臭氣は漢字に固着するものなるに依て、漢字を用ふる間は支那の臭氣を脱することは極めて六ヶ敷、多く漢字を知てゐれは知てゐる程、支那風の根性が強くて、どうもこうも仕方がないといふとは世人も普く知てゐるだろうが、漢字の行はるゝ間は是れ亦已を得ざることで御坐ります。第六漢字は漢語を表す爲には便利なるかは知りませぬが日本語及び西洋語を表すには頗る不便なるものです。第七、漢字を用ふる間は如何なる學術を敎授するにも半分は文字の講釋に終らざるべからざる次第に立至ります。尙此の外にも漢字を廢さねばならぬ理窟は澤山御坐りますが余り學問上に渉りますから之れを略きまして次に羅馬字の便利なることを手短く演べませう。

第一、羅馬字を用ふるとにすると是れまで漢字を讀書する爲に費したる時間は全く之れを有益なる事業を學ぶ爲に用ふることが出來るやうになる利益があります。第二、羅馬字を用ふる時はさまで時を費さなくて書物を讀むことが覺えらるゝ故、書物を讀む者の範圍が極めて廣大になる理由です。第三羅馬字を用ふる時は書物を讀むことが易くなる故に知識を得ることも亦隨て易くなる道理です。第四、羅馬字は我が邦の言語のやうに多くの音を以て成立つ者を綴るに甚だ便利な者で御坐ります。第五、百事百物之を西洋に取る今日に在ては其の事物につれて西洋の語をも取ることが餘程必要な場合も尠なからずと存じます。そこで之れを取るには羅馬字を用ふるのが至極都合よき事であります。第六、羅馬字を用

ふるときは分らない譯語を新に作り立つるに及はず、又之れにて譯語新製の弊害を免るゝ事が出來るではありませぬか。第七、羅馬字を用ふる時は支那の固陋なる習俗を脱却して文明開化の新鮮なる空氣を吸ふことが易くなること萬々請合ふ可きことです。第八、羅馬字を用ふるとは、我邦の人民中にて將來屹度全權を握るに相違ない部分、又我が邦將來の安危を身に繫く部分、即之を略言すれば西洋語に通ずる人達は必之れを便利なりと認めるで御坐りませう。第九、羅馬字を用ふる時には學術を敎授するに當りて文字の講釋の爲めに多分の時間を浪費するやうな弊は全く除き去ることが出來るで御坐ろう。尙此の外に羅馬字を以て綴りたる語は大層つゝまりがよくて一目して解すことが出來、又横文字は縱文字より讀み易い抔、羅馬字が便利だといふ箇條は澤山あるが大層緻密な學問上の議論になるから之れを置きまして、次に今日羅馬字會を起すとは一日も猶豫してはならぬと云ふ特別の理由に說き及ぼす事に仕つらう。

今日羅馬字會を起すことは一日も猶豫してはならぬといふ理由は、少くも四個あるやうに思はれます。今一々之を陳べませう。第一、づッと見渡すに近來我が邦の人民の中には普通敎育の中に英語を加ふる必要を悟りたる者が段々多くなりて殊に時事新報、東京横濱毎日新聞、東洋學藝雜誌記者の如きは必死となりて之れを主張しました。又政府に於かせられても御同感の方々があらせらるゝ者と見えて、既に先般學習院の小學科中に英語を加へられ、續きて京都府の小學科中へ英語を加ふることを許され、又候、東京女子師範學校中へも英語の專修科を置かれましたが、竟に、頃は明治十七年十一月の九日と云ふ日には、文部卿閣下は小學生徒に英語の讀方、會話、習字、作文、等を授くることを許されました。箇樣に普通に英語を敎授す可しと云ふ論が天下の輿論となつた上は、爾後我が邦に於て英語に通ずる者は其の數、實に夥しいことに成りませう、して又英語に通ずる者に取りては羅馬字で邦語を綴つたり、又は羅馬字で綴つた

邦語を讀んだりすることは何の苦もないとですから、今より數年を出ずして羅馬字主義の贊成者は非常に增加することは鏡に掛て見るやうで御坐る。然れば今日より豫め其の綴り方を定めたり、又は字書などを作りて置くのは極めて必要な事と存じます。第二、今日の世の中に、成程理論上で羅馬字が一番便利だが、贊成者が少からうといふ懸念があつて、或は「かなのくわい」抔を贊成して居る者も多い。して見れば今日羅馬字主義に熱心してゐる人々は是非とも羅馬字會を起して廣く同感者を天下に募り、其果に羅馬字主義の人と、假名主義の人と何らが少數なるかを見極めることは甚緊要な事と思はれます。第三、仄かに承るに政府に於ても吾々と感を同くして漢字の不便を歎かせらるゝ御方もお坐するとか。其方々のお考では羅馬字者流だの、假名者流だのと云ふて世間に吹鳴る奴原は澤山あるが彼奴等は何故綴方なり、字書なり、是れならば漢字に換へるとが出來ると思ふものを立流に組立て政府に相談に來ぬだらうとて私に

惜み居らるゝと申すとです。これまた速に羅馬字會を起さなければならぬ一の理由で御坐る。第四、羅馬字主義の人が羅馬字會を起して公然と旗揚をなし漢字を廢して仕舞ふて之れに換ふるに羅馬字を以てすべきことを唱へなければ全國中如何程の羅馬字者流があるとも皆漢字者流と思はれ漢字廢止論を唱ふる者は特り假名者流に限れるやうに見え、德をするものは眞の漢學者流ばかりに成るだらう。そこで羅馬字者流は一日も早く旗揚をして假名者流の外にも漢字を廢さうとする者は澤山あるといふことを天下に公にせねはならぬ。さうせぬ時は羅馬字者流の罪業深かりと謂はねばならぬ。是れ亦羅馬字會を起さねばならぬ一の理由で御坐る。

最後に臨みて某は假名者流と羅馬字者流とに一言忠告致さねばならぬ事が御坐る。別の儀でも御坐らぬが、羅馬字者流は出來る丈假名者流を攻擊せぬやうにし、又假名者流は成る可く羅馬字者流に敵對せぬやうにするがよい。蓋し羅馬

字の敵は假名ではなく、漢字で、又假名の敵は羅馬字でなく是れ亦漢字では御坐らぬか。此漢字といふ强の敵を前に扣え乍ら假名者流と羅馬字者流と喧嘩をするのは同士討と同じとで思慮ある者の當に爲す可からざるとで御坐る。假名と羅字とが喧嘩をおつぱしめて雌雄を決するのは漢字を亡してから後に行る事で先其れまでは同士討に力を費さぬやうにし假名者流は假名の書方抔を少しでも改良して、成程假名は便利な者だと天下の人に思はれるやうに心掛けねばならず、又羅馬字者流も同樣に邦語を綴る最良法方を研究し、又は字書抔を作ると を專一に勉めなければならぬ。

以上演說致しましたものが、即、今日羅馬字を以て邦語を綴ることを主張する會を起さなければならぬと云ふ趣意の概畧です。先是れ丈を申し上げて置きます。

（明治十七年十二月、東洋學藝雜誌、第三十九號）。

○第十八　英語沿革考

末松謙澄君

（此篇は末松博士著日本文章論の附錄なる歐文沿革考中の一節なるを博士に請ふて此處に掲載し、一には以て文章改良の出來得べきことの例證と爲し、二には以て言語沿革史に對して世人の注意を喚び起こすの媒介と爲さんと欲す）。

日本文を改革するには第一に紙上の言語をして口頭の言語と相接近せしむる方法を講ぜざる可らず第二に和漢混合の書方を改め之を一定の綴字（譬へは羅馬字若くは假名字）に歸せしむる手段を施さゞる可らず此の二大目的を達するは其業固より容易ならず是を以て世人或は成功の如何を危むものありと雖とも僕を以て之を觀るに不容易は則ち不容易なり其成功は決して難きに非らす之を西洋諸國の史籍に徵するに其言語文章は我か言語文章に大同小異の艱難を經しと一にして足らず而るも猶能く今日の美を致すを得たり我日本と雖とも措置苟も其宜を得は豈成功せざるの理あらんや。

試に英國言語文章の變遷を見るへし羅馬人征入の前英國の土言は歐洲言語三大種族の一なる土言にてケルチック語なりしが羅馬人之を征服するに及び各所に兵營を置き大道を開て國内の行通を便にし鎮將を發して政令を行ひ羅馬市街を造り遂には天子自ら蹕を移せし者あるに至る斯の如きと四百年に内外す此時に方り英國には羅馬語と土言との二種ありしと知るべし（勿論蘇格蘭及愛爾蘭の土言は英國内地の土言とは幾分の差あれとも同くケルチック語種族に屬す）羅馬兵權の衰ふるに及び日耳曼北部の人民亂入を四方に始め英國にはエルブ河畔よりサキソン人アングル人ジユート人など續々として諸方の海岸に攻入たり時に羅馬人は既に舉て其本國に歸り土人は戰ひ死するあり捕へられて殺さるゝもあり深山幽谷に潛逃するもあり其僅に殘りたるは悉く奴隷とせられ婦女子には攻侵人の妻となりしもあるべけれとも素より其土言を保持する勢力なく遂に英國の言語は攻侵者輸入の言語に化し羅甸幷に從來の土言は殆んと其蹤迹を内地

に留めざるに至れり其狀恰も我日本人が蝦夷人種を攻伐し我か古言を輸入せしと同じと思はる今の英語の本宗は即ち此攻侵人輸入の語なり其の首としてアングロサキソン人の輸入に係るが故に或は之をアングロサキソン語と稱す勿論均しくエルブ河畔の土言に出たる者とは云へとも輸入の種族の異なれば地方轉訛は幾分の差異ありしと知るべし併し兎に角に文字もありて書を作る術を知れり其用ふる所の文字は日耳曼の古字體に似たるもあり羅甸字に似たるもあり故に學者の説にも日耳曼より持來りたるものなりと云ふもあり從來の土人が已に羅馬字を折衷して作り居たるを取たるなりと云ふもあり又此二體を合して新に作りたる者ならんと云ふもありと雖とも確證の徵すべきなければ姑く之れを舍くもアングロサキソン語の英國に行れしこと六百年の久きなれは其間漸次に其體裁を成せしは疑ふ可らざる事實とす殊にアルフレド王は幼少にして二たび羅馬に遊びしともありて夙に文學の要を悟り自ら率先して新書をも著し羅馬書をも

飜譯し已に粲然觀るべき文章ありしと其遺物を見て明なり。

然るに其頃よりして既にデーン人種（即ち今の丁抹諾威邊海岸の人民）英國に攻入し遂に王統もデーン人を奉ずるに至れりデーン人の言語はアングロサキソン語と其の種族を同すと雖とも發音其他悉皆同一の者と云ふべからざれば在來の英語に幾分の變動を與へしと知るべし已にして能爾曼の攻入に遇ひ世は全く變じて封建制度となり言語も古來未曾有の大變化を生じたり其故は國王は能爾曼人なれば宮中の言語は固より能爾曼出の佛語たるのみならず國中各處に封ぜられたる諸侯幷に附屬の武人は孰れも能爾曼人なれば是亦悉く佛語を用ゐ遂に裁判所の言語まで佛語の外は用ゐざらしむるに至れり而して在來の英人を問へば征服せられたりとは雖も以前土人が日耳曼人に其大半を殺されたる時と違ひ人口も多く且急に外國語を學び得る者にあらざれば依然として在來の英語を用ゆ詞を換て之を言へば英國は此時に至り再び二種の言語を國内に出せしと最初

羅馬人攻入の時と同じ勿論能爾曼人の攻入は羅馬人の攻入と其趣も變はり何事によらず上下の交通は幾層の接近を加へたれば時日を經るに隨ひ能爾曼人は幾分か英語を覺え英人は幾分か佛語を覺え其發音も英人が日耳曼より持來りたる北方の堅音は能爾曼人が持來たる南方の輕音に化せられ能爾曼人の南音も幾分歟英人の北音に化せられ云はゞ雙方歩み合の如き姿に趣きたりと雖とも猶充分の混和に至らず故に此時代の著書は上等士流の爲にする者は佛語を用ゐ一般人民の爲にする者は英語を用ゐたれとも其さへ兩語とも未だ完全ならず殊に英語は已にアルフレッド王時代の盛時を失ひたれば其艱難想ひ知るべし且又學者の重に研究する所は羅馬書にして法律や教法の思想を表出する熟語は已に羅馬語に備はれるを以て此等の著書は一般に羅馬語を用ゐたり之を日本に譬れは支那文字の流行せしより記する所の事柄は目的とする所の讀者の差により漢語交の和文と假名文と又不出來ながらも純粹の漢文に倣ひたる者と同時に行なはれし

と髣髴たり英國の文明世界は斯る紛雜の有樣なりしかば當時の人の思想にては之を調和して一の好文章を得んとは殆と言ふ可くして行ふべからずとすると猶今の日本人中に日本文章改革の成功を危むと同じき人も多かりしならん然るも當時英國の操觚者は中々に辟易せす文壇の豪傑も前後に顯はれエリサベス女王の代に及んでは英國の文物勃然として起り英國文章黃金時代の稱を得るに至れり此偉功を奏せし第一の文豪はチョーサ其人即ち是なり此人生れて材幹あり國事の功勞も少からす英國文章の衰微を歎しカンテルブリー巡禮談を作る其書は始詩體を用ゐ末段二篇は散文を用ゆ（序言より推して見れば猶幾編あらざる可らず且つ末段の散文に變ぜるを怪み巡禮談は大成に至らず末段の散文は他人の追加ならんと論すると源氏宇治十帖は別手に出るならんと云ふに同じき說あれども是れ等は考證家の事業に過ぎず）チョーサの此書を作るや大に思ふ所ありて當時に併び行はれたる佛語英語を混化して其粹を選び之を行るに妙文を以て

し遂に今體英文の基礎を一定す其後は此體裁を用ゆる者追々に起り綴字法の如きは言語發音の變遷に因て之を改め學術上の熟字の如きは巧に羅馬語を採用して英語となし有力の著述家相續て輩出し遂に前に云ふエリサベスの盛代を來たすに至りたるなり此時代より後と雖も諸學者の勉强により英語の進步せしは論を待ざれども之を建築に譬れは九仞の大功は已にエリサベス時代に至るまでに竣功したりと云ふへし勿論印刷の術はカクストンと云へる者夙に大陸地方より輸入したれはエリサベスの盛代を致せしも印刷の力大に與て之に居りしならん而して印刷の術と雖も始めは甚だ粗末なりしことカクストンが始て印行したる書の字體の不器用なるを見ても知るへし其今日の美に至るまでは幾多の改良を經たるなり印刷の改良は必らずしも英人の功のみにあらずと雖ども亦決して之を忘る可らず將に綴字法の改良の如きは遠く延て近世に及べり試に今日の文章を取り之をチョーサの文章に比するに著るしく其の差を見る先づ語尾の ED は

之を除けり是れ往時は語尾に E の音を附したれども南方の音に化せられて之を響せざるに至りたれば之を省たるなり例へは今の Had は Hadde 又は Hatte に作る日耳曼にては今も猶 Hatte に作るは語尾の猶存せるなり又語尾の ie は今 y の一字に作る今の sh は悉く sch に作る日耳曼にては今も sch に作る「シ」音の强き者なり南方音に化せられ稍緩音となりし上は中央の c は要用ならざるが故に簡省に從ふ又古の Whan は今 When に作るの類は音聲の變化に據るなり又た古の Bisschop は今 Bishop に作るの類は中央の c を省けるのみならず一の s を除き短簡を求めたるものなり此の他猶枚擧に遑あらず之を要するに力めて發音に近く且く字數を減ずるを勉めたる者の如し勿論今日の英語の綴字法は之を眞の發音に比すれば猶不規則の存せると多きは掩ふ可らざるの實とす例へば Light の gh は今は全く不用の文字とす是れ其元は日耳曼の Licht と同出處の字にして英國にても往古は gh を讀せたるに其後讀まざるとなりても猶未だ之を除くに至らざる者なり此類の文字頗る多し又或は學者先生の熱心の爲め或は反つて字數を長くせしものなきにもあらざるべし例へは後世 Delighted と書く所を古は却つて Delited と書きたるを見たるとあり是れ古法反て簡短にして發音に叶へり然るに此の字は元來 De と Light との二語より成立たる者なれは熱心學者の眼にて見れは如何にも gh を加へたく思ひ却て Light の gh こそ已に無用に屬すれば之を除き簡短の綴字に改むべきを忘れたる者なり此等の不規則は英米人の已に自ら悟る所なれは現に英米に於て再び大に綴字法を改革し全く不規則を取除き以て英語をして完全無缺の壁たらしめんとする士人も至て多し此の再度の改革論の成否は姑く置き今日の英文を以て論ずるも英國人民が數多の困難を蹈越々々以て今日の美を致したる形迹は實に我日本文改良を謀る者の規範と爲するに足るか如し。

○第十九　卑見を約言す

以上述べしところ、頗る亂雜にして且つ多岐に渉りたるを以て、予の意見を明解するに苦まるゝの讀者あらんとを恐る、依りて今左に其要點を反覆せん。

(一) 我國の文字文章は學習に困難にして使用に不便なり。

(二) 歐米諸國と競爭せんと欲せば是非共我國の文字文章を改良せざるべからず。

(三) 漢字交り文は險路を徒步にて旅行するが如く、表音字文は鐵路を滊車にて旅行するが如し。

(四) 候補者として名乘り出でたる表音字數種あれども、其中にて我國に最も行はれ易きは舊來の假名文字なると勿論なれば、先づ縱書きの假名文を盟主となして兵を擧ぐべし。

(五) 横書きの文章は縱書きの文に章比して頗る讀み易し。故に横書を主張する人は漸次に增加すべく、新製字の行はるゝに至らんも蓋し遠きに非ざるべし。

(六) 文字の改良は一時に成るべきものに非らず、改良論者の講窮すべきは耐久策を以て第一となす。若し一代にして成らずんば之を子孫に遺して成さしむべし。

(七) 事を急ぐ者は却つて後るゝは通例の事なり。一足飛びに理想に達するの手段を考へんよりは寧ろ段階を踏みて漸次に進行するの方針を執るべし。予之を聞く、英國には漸進主義の人多く、佛國には急進主義の人多く土耳其支那には守舊主義の人多しと。三者中予の最も欽慕する所のものは英國主義なり。然れども英國主義にして勝算なくんば則ち寧ろ佛國主義に味方せん。土清主義に加勢して自國の劣敗を招くは余の忍ぶ能はざる所なり。

(八) 文字文章を漸次に改良するの方法は如何にと云ふに、予を以て之を見れば文字改良の第一段は假名漢字をして兩立せしむるに在り。之を名けて振假名文と云ふ。其の第二段は假名にて間に合ふべき言葉は成るべく假名にて之

を綴るに在り。之を名けて假名奬勵主義の文章と云ふ。此文章より縱書きの假名文に進み、縱書きの假名文より横書きの假名文に進まん。之を文字改良の最も安全なる方法と爲す。又文躰改良の結局は語格と文格との一致に在るなれども、古文法を全然度外視するは予の本意に非らず。古文口調の優柔温和、漢文口調の悲壯典雅、歐文口調の緻密精確、談話口調の平易通俗、皆採りて新文體の材料と爲すに足る。談話口調は以て新文躰の基礎と爲すべく、古文口調は以て其の棟梁と爲すべく、歐文口調は以て其の瓦壁と爲すべく、漢文口調は以て離座敷に風致を添ふべし。然らば目今吾人の第一に注意すべきは文章の基礎と爲すべき石材の撰擇にして所謂る日本語の研究是なり。而して世人の是れまで蔑視し來りたる談話躰を扳擢して文章の基礎とせんと是れ亦容易の事業に非らず。予が談話躰の位地を高めんが爲めに提出せんと欲する手段は

第一、普通文に用ふる言語は成るべく談話上の言語と一致せしむると

第二、談話口調にて間に合ふべき文句には成るべく談話上の語格を用ふると

第三、談話のまゝを記載せる書物の出版を奬勵すると

等なり。右數種の手段を用ひ、漸次に言と文とをして相接近せしめんとを計らば數十年の後には立派にして且つ便利なる日本新文躰の建築は落成せん。落成の期をして早からしめ又晩からしむる、一に學者の努力如何に在り學者之をつとめよ。

(九)　改良論者は宜く其の度量を寛くし、少異を恕し大同を以て結合すべし。島國根性を棄てゝ眼を世界の全局に配るべし。小を忍ばずして大謀を亂るとなれ。

○第二十　文字文章改良に關する論說

文字文章の改良に關し予の閲讀せる書物、論説、記事等の重もなるものを擧ぐれば左の如し。

外山正一君著

新体漢字破　（明治十七年十二月出版）

外山正一君述

羅馬字會を起すの趣意　（明治十七年十二月、東洋學藝雜誌三十九號）

東洋學藝雜誌雜報欄

羅馬字會に關する記事　（明治十八年より明治二十年までの東洋學藝雜誌）

（東洋學藝社の承諾を經て左に其の要點を拔摘す）。

○羅馬字會は去る一月十七日（明治十八年）規則を議定せし以來入會する人陸續絶えず會員の數殆んど千名に達したり。

漢學者には此會に加入する人は無かるべしと考ふる者もあるべけれ共東京大學の内藤耻叟氏抔は既に入會せられたり。（第四十二號、明治十八年三月）。

○羅馬字雜誌　兼て世間にて待受たる羅馬字雜誌は過日羅馬字會に於て其一號を發兌せられたり。（第四十五號、明治十八年六月。）

○去る十二日（七月）には同會會員の數四千三百三十名にして一ヶ月間に會員增加の數は平均一千四百二十六名なり。（第四十六號　明治十八年七月二十五日）。

○羅馬字會は其勢益盛にして會員の數は去る七月末の調査には四千八百十人にて内、外國人二百五十四名なりと、猶ほ日々三十名餘の申込人有る由なり。（第四十七號十八年八月）。

○羅馬字會の總會　去る三月十九日（明治二十年）には虎の門内工科大學の中堂に於て羅馬字會の第二年會ありたり榎本武揚君米國公使ハバールド君渡邊洪基君文科大學教師チャンブレーン君の演説ありたり來會者は無慮八百人もありて其中には内外の貴婦人紳士をも多く見受けたり。（第六十七號、二十年四月。）

矢田部良吉君

教育家の一讀を煩はす　（明治十九年二月、東洋學藝雜誌五十三號）

物集高見君著
言文一致（明治十九年三月出版）
矢野文雄君著
日本文體文字新論（明治十九年三月出版）
末松謙澄君著
日本文章論（明治十九年十一月文學社出版）
西村貞君
日本普通文の前途（明治二十一年一月大日本教育會雜誌七十一號）
中川小十郎君
正木政吉君
男女の文體を一にする方法（本日本教育會雜誌七十三號七十四號）
加藤弘之君著
小學教育改良論（明治二十七年四月哲學書院發行）

井上哲次郎君述
文字と教育の關係（明治二十七年四月、五月、東洋學藝雜誌一五一號、一五二號）
早稲田文學記者
國字國文（明治二十八年二年早稲田文學八十二號）
同　上
新國字論に就きて（明治二十八年五月十日同上八十七號）
筑水君
新文字論は早晩決せられざる可からず（同上）
同　上
新文字論者は一時の失敗によりて沮喪すべからず（同上）
早稲田文學記者
國字論（明治二十八年六月わせだ文學九十號）

上田萬年君著
國語のため（明治二十八年六月富山房書店出版）
三宅雄次郎君
漢字の利害（明治二十八年一月太陽一號）
大西祝君
文學上の新事業（太陽三號）
三宅雄次郎君
國字を論ず（太陽五號）
上田萬年君
歐洲諸國に於ける綴字改良論（太陽七號）
木村鷹太郎君
日本文字改良案（明治廿八年五月教育時論三六四號より三六七號まで）

岡倉由三郎君
新國字論（明治二十八年六月、七月、八月帝國文學六、七、八號）
帝國文學雜報欄
俗語研究（帝國文學第七號）
元良勇次郎君
横讀、縱讀の利害（東洋學藝雜誌百六十五號）
老婆生
標準語につきて（明治二十八年九月教育報知四百九十號）
田中勇吉君
談話科の準備及び其方法（同上）
高津鍬三郎君
關根君の語法私見を讀みて（明治二十八年十月十日早稲田文學九十七號）

（此論文中の一節を抜萃して左に示す。）

「さて、國文の沿革を調べ、現時の通行文を考へ、各種の文躰に存する文格語格を分拆綜合して、新文法を組織せんには、それこそ先づ完全なる新文法のやうなれど、我國現時の有樣にては決して然らざるを覺ゆ。何となれば、今日我が通行文躰の亂雜なるは維新後、泰西の新智識を傳播するに急なりしより、百事その形式を省みるに遑あらざりし餘波にして、文界一時の變象に止り、永續すべきものとも思はれざればなり。近來社會の事物漸くその緒に就くに及んで、世人始めて事物の形式にも注意するに至りしより、文法假字遣ひ等にも、氣を付くる者多くなりたるなり。而して今日の有樣には反動的變象多くして、時を經ば、漸く自然發達の姿に歸着すべきもの多きが如し。文章の如きも、またその一ならんか。新文法の材料として、最も適當なる文章は、普通教育を受けて、國語に關する知識を有する者の書きたるものなるべけれど、今日の如き國語の教授法にては、その教授の進めば進むほど、寧ろ古躰に偏したる文を書くが如き有樣なれば、これまた今日にありては、新文法の材料となすに不適當なるものなり。要するに、今ま我が國にて文法を書きものの上より組織せんには、如何なる方法に因るも、實際の應用には、頗る不便なる點あるを免れざるべし。然るに、口語の變遷は、その性質上如何するも大抵の場合にありては、自然に逆ふこと能はざるものなれば、口語の上に存する規則こそ、最も實用上に不都合なきものなるべけれ。言文は、徹頭徹尾一致せしむべき必要もなけれど、その相懸隔せる時は、實際の不便少からざるなり。故に、なるべく之を相近接せしめざるべからず。而して、我が國現在の有樣の如きは、その懸隔實に甚しくして、これが爲に、規定の教育を受けたる者にても、正しくその思ふことを、自由に書き現はし得ざる者多し、あに慨歎の至ならずや。普通教育界には、數年前より、國語を、

重要なる學科の一として、その講習を奬勵したれども、その講讀するところは主として、土佐日記、徒然草の類に過ぎず。文法は、中古以上のものに限きられたるが多かりければ、その教授の効能の、最もよく現はれたるところにても、生徒が、端書にこそけれなん侍る的の文を認むるに至れる類のみ。かゝる擬古躰の文は、一種の美文としては、價値なきにあらねども、今日の實用に供するとは出來ざるなり。是に於てか、近來また漢學の必要を感ずる者多きが如し。それ、普通教育の一學科として、漢籍を講讀するの必要いづくにかある。普通の智識を知る點に於ては、更にこの種の書物を見る必要なけれど、文字を知り、熟語を覺ゆるには、國語教育の不完全なるよりして、その必要なしといふべからず。實に、今日の通行文を書くには、土佐日記を講習するよりも、寧ろ文章軌範の講讀を必要とするなり、何となれば、今日平生の言語には、所謂大和詞よりも、寧ろ漢語を使用すると多きのみならず、

多數の人の書く文躰は、概ねみな漢文直譯躰のものなればなり。然れども、この文躰は、余輩の思想を現はす上に於て、毫も不都合なく、遺憾なきものにはあらず。その文法の不精密なる、その用語の奇怪なる、書く者は書き惡く、讀む者は解し難し。然も、今日尙ほその勢力の大なる所以は、かくの如き文章を讀み書きするに、最も適當なる教育を受けたるもの多ければなり、學術日に開け、智識日に新たなる今日にして、思想を現はすの最良法たる文章のみ、ひとり之に伴はざるの感なきにあらず。それ、今日吾人の精密なる思想を現はすには、和文體もとより不可なり。漢文直譯體また不適當なり、洋文口調また面白からず。而して、特り依頼すべきは、口語體なるのみ。

早稻田文學記者

俗語の研究　（明治二十八年十月十日早稻田文學九十七號）

六合雜誌記者

文字論並文躰論　（明治二十八年六月六合雜誌百七十四號）

六合雜誌記者

漢字の利害一班

（明治二十八年八月六合雜誌百七十六號）

（此論文中の一節を拔萃して左に示す。）

「文字改良論も其の實行はか〳〵しからぬに非らずやとて此の論を輕ぜむとする者あり若し速急に其の功を奏し得べしと思ひて文字の改良を唱へば是れ甚しき誤謬なり改良論は實行し易きが故に唱ふるにあらず但だその事の重要なるが故に今より徐々に其考案を回らすを要すと言ふなり重大なる改良又は改革には頑强なる反對と困難との存するが常なり而も其の困難の大なるとは遂に改良を無用視するの理由とはならざるなり假令ひ五十年又は百年又は二百年の後に至りて尙ほ全く改良の實行されずとするも之を唱ふることを思ひとゞまるべきにあらず改良を唱ふるは必しも其の事の早く行はるべきを期するが故にあらず假令ひ改良案其儘は未來永劫行はるゝことなしとするも尙ほ之を稱ふるによりて實際の利益を來たし得ると些少にあらず我が國字の改良を言ふに當りては實行の難易遲速を見てその事件の忽にすべからざることをば忘れざらんを要す敎育上の利害を考へても文字改良論の鄭重に熱心に攻究すべきものなることは少しく事理を解する者の否み得ざる所なるべし予輩は必ずしも今新國字を製造して之を授けんとするにあらず但だ文字改良論の輕ずべからざる、冷笑すべからざる、我國人の忘るべからざるものなることを切言せむと欲す予輩は先づ此の論の重要なることを深く我が國人の心に印せむと欲す若し深く之を印し得ば改良案は續々出づるに至らん少しく事理を解するものは此論の重大なることを否まざらんと雖も尙ほその如何程重要なるかを眞實解したる者は多からざるなり」

大日本教育會雜誌

普通教育上の習字科より楷書を除く説　（第百七十號、明治二十八年十月）

中村秋香君

書翰文體は匡正せざるべからず　（明治二十八年十月太陽十號）

早稲田文學記者

國語界　（明治二十八年十月二十五日早稲田文學九十八號彙報欄內）

大日本教育會雜誌

教育社會の通弊　（第百七十一號、明治二十八年十一月一日）

（其中の一節を拔萃して左に示す。）

「文字論の如き、學問上やゝ重大なる問題なり。漢字の排不排等は教育上頗る重要なる關係あり。世人は學者の理論と共に實際局に當れる教育者等の談をも聽かんことを望めり。而して聞として聲なきに非らずや。教育者は世に疎きのみならで學問にも疎き嫌なきか。嫌なくんば幸なり。若し玆に一あらば啻に世人の此くの如くならしめたるの罪あると共に、教育社會の不面目なり。」云々。

上田萬年君

新國字論　（明治二十八年十月、十一月、東洋學藝雜誌百六十九、百七十號）

元良勇次郎君

再び縱讀橫讀問題に就て　（日本新聞二十八年十月二十四日二十五日）

山陽の一書生

「再び縱讀橫讀問題に就て」を評す　（日本新聞、二十八年十一月九日十日）

岡田正美君

漢字全廢を論じて國文國語國字の將來に及ぶ　（明治二十八年十月帝國文學十號より第十二號に至る）

（其內の一節を左に示す）

『漢字全廢は十人百人の力の到底及ぶ所にあらず、法令の力を借りてこそ始めて實行するを得べけめ、とは余が本論に於て述べたる處なり。さて之を法令によりて强行せんにも、またはみづから漢字を廢棄せんとするにも、おのづから行ふべき順序あり、濫りに之を强行せんには、不便誠に堪へがたかるべくして策の宜きを得たるものにあらず。

第一には、まづ假字を以て國字と定むるよしを布達し、次に人名、地名、官廳名、官職名に用ゐる諸々の漢字、幷に最も普通に用ゐられて之を廢用する時は最も困難を來すべき名詞動詞の漢字、此等をば限りて、餘は悉く之を使用するを禁止し〔松軒曰く、此處意味明瞭ならず、公文及び尋常小學校の教科書に之を使用するを禁止すと言ふては如何〕且つ此等制限內の文字には悉く傍訓假字（フリガナ）をつけて使用すべきを布達すべきなり。—尋常小學の生徒に讀ましむべき讀本の如きはさし當りては、主として此規定に從ひて書すをよしとす。（之は上田文學士も常に唱道せらるゝ處なりと聞く）。—かくて、國民が普く假字を使用することに慣るゝを待ちて、茲に、第二の法令を以て、漢字の全廢を布達すべきなり。（言、固より、普通用漢字に限る。〔松軒曰く、言固より公文及び尋常小學の教科書に限ると言ふては如何〕）。茲に至りて予が望む所は達せられたるなり。

『予嘗て小學讀本を一ッ二ッ檢めしとありき、まかしてその讀本の、尋常科用なるにも係はらず、使用したる漢字の中には、實に左に列擧するが如きもの多かりき、吁、兒童の、未たその實質を學ふに至らずして、たゞ文字の外形にのみ孜々として徒らに歲月を費すもの幾何ぞや、又相當の思想ありながら、漢字漢語を知らざる爲に、之を表はすに苦むもの幾何ぞや。嗚呼天下の眼ある人よ、國民教育に志ある士よ、乞くは、自己の便益をのみ計らず、日常の便否をのみ思はずして、將に來るべき國民、當代諸士の後を繼ぎて我皇國の

威名を世界に發揚すべき未來の大國民たる諸士が子弟、諸士が子孫の、上をも顧慮する處あれ。』

輕鬆　耙交　巍峨　煌々　明徹　慚伏　稼穡
肆店　駢列　潤澤　敍々　焙爐　咀嚼　蠕動
糜爛　渣滓　苜蓿　零陵香　蕪蔞　馬鈴薯　蕪菁蹄
毳氈　壓扁　茸々　絨毯　襯衣　艷春　倏忽
翠鬣　菌蕈　婆婦　啐き　整し　闊鋏　輪奐
楊扇　野寇　柳木　頭陀　扮粧　匡濟　約諾
高燥　開豁　潴留　爽快　兵燹　崖下　洞窟
流竄　草莽　滑匿　播種　嫩葉　禍譴　小衂
燦爛　熱鬧　煤氣燈　崖嵬　絡繹　蒙茸　鬚髮
狰獰　一搏　庖厨　贏餘　雕木匠　精緻　膠質
鰐滓　玉蜀黍　撓下　翩々　撒す　櫛比　荒漠
垢膩　蓊鬱　荊棘　蘆荻　顰し　巨礮　蟋蟀

顫動　耳朶　礴苔　誅戮　蠶蝕』。

松軒曰く、岡田氏の論文は昨年來、世にあらはれたる新國字論中最も精密なるものなり。予は國字改良に關して斯くの如き大論文の現出せるを見て此の事業の前途甚だ望みあるを喜び深く同氏に其勞を謝し、且つ同氏に左の二事を望まんと欲す。

（一）國字改良の問題は我國の學者が悉く研究すべき問題なり。故に同氏の此論文も「帝國文學」に掲載せらしのみにては未だ以て十分と謂ふべからず。同氏が之を一冊子として廣く之を天下に布き、且つ後世に傳へられんと是れ予の同氏に對して切に望む所なり。

（二）新國字論をして効能多からしめんが爲めには現時社會に勢力ある人に讀み易き文躰を以て之を綴らんとを要す。然るに同氏の此論文に用ひたる文躰は果して斯くの如きものなるか。予の見る所にては多

數の教育家、多數の政事家、多數の法律家、多數の新聞記者、多數の理學者、多數の工學者は恐らくは此論文を以て甚だ讀み易しとは見ざるべし。蓋し彼等の最も熟せる文躰は漢文口調及び演說口調の文躰にして、此論文の文躰の如きは彼等の未だ熟せざる所なればなり。同氏が此論文を一冊子と爲すの際此點に注意せられんと是亦予の希望する所なり。

文字文章改良論　終

PRIMARY
ENGLISH GRAMMAR
FOR
JAPANESE STUDENTS.

初等英文典

BY
I. SUGANUMA.

テ編纂セル モノニテ國文英文ヲ交ヘ最モ解シ易ク最も記憶シ易ク最モ實用ニ

○全一冊（訂正第四版）
○紙數　百四十八頁
○代價　貳拾四錢
○郵稅　四錢
○代金ハ貳錢ノ郵券ニテモ苦シカラズ
○明治三十八年二月二十六日文部省檢定濟尋常中學校尋常師範學校外國語科用書
○本書ハ著者ガ英文法ノ良教科書ナキヲ嘆シ中學校教科用書トシテ編纂セル モノニテ國文英文ヲ交ヘ最モ解シ易ク最も記憶シ易ク最モ實用ニ

適スル樣英文法ヲ論述セリ明治二十七年二月ニ其初版ヲ發行シ明治二十八年四月ニ其ノ四版ヲ發行セリ發行所ハ東京市神田區裏神保町一番地三省堂書店ニシテ賣捌所ハ嵩山房書店ナリ

文學博士末松謙澄君序文
靜岡縣菅沼岩藏君著

言文一致　**桃太郎の話**（本文）　代價金八錢○郵稅貳錢　○代金トシテ郵券代用苦シカラズ

○此書ハ歲暮年玉生徒賞與品等トシテ最モ適當ナリ

○一時ニ十部以上取纏メ御注文ノ節ハ一冊郵稅共金八錢五厘ノ割ニテ爲替ニテ御送金アリタシ

言文一致　桃太郎話附錄

文字文章改良論　○代價貳拾貳錢○郵稅四錢　○代金トシテ貳錢ノ郵券代用苦シカラズ

○右二書ヲ同時ニ御注文ノ節ハ郵稅共金參拾參錢御送金アリタシ

東京日本橋區通二丁目　嵩山房書店敬白

文字文章改良論附錄

目　錄

Page.

I. Märchen (or Child's Stories.) 1

II. 萬朝報投書欄ノ漢字排除論 11

III. From Meiklejohn's English Language 15

A. Latin of the Third Period 15

B. Losses of English from the Incoming of Norman-French 20

文字文章改良論附錄

MÄRCHEN (or Child's Stories.)

（此篇ハDr. Hausknechtノ想像力ニ就テノ講義中ノ一節ノ大要ニシテ予ガ文科大學ニ在リタル際筆記セルモノナリ其文章中ニ誤謬アラバ是レ筆記者ノ誤謬ナリト心得ラレンコヲ讀者ニ乞フ）

"At first," says Compayré in his 'Lectures on Pedagogics', "the child has a remarkable tendency to personify all objects which surround him, to represent them to himself after his own image, to enter into conversation with animals, and even with inanimate things. The mental state of a child is like that of primitive people who attributed life and feeling to material objects. The sun has risen. The child asked, 'Who then is his maid?' Greeks believed that Apollo drove the chariot of the sun through the heavens. A little child imagines that the sun should be taken out to walk by an attendant."

More or less, different ages of history had taken the advantage of this tendency of the child. The Greek boy had, and has still, "Homer." Jewish boys had patriarchal stories, and in Middle Ages we have epic traditions which serve educa-